TOGARIISHI SITE

尖石遺跡

――平成15年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書――

2004. 3

茅野市教育委員会

TOGARIISHI SITE

尖石遺跡

――平成15年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書――

2004. 3

茅野市教育委員会

はじめに

茅野市には300以上もの遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000m前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている豊平地区の尖石遺跡です。

永年、地権者の皆さんや地元の方々の理解と熱意によって、保存されてきましたが、近年の開発はついに尖石遺跡の周辺にも及んできました。そこで茅野市では、このすばらしい郷土の文化遺産を保存し、後世に受け継ぐべく昭和62年度から国・県のご援助をいただき、尖石遺跡の公有地化を行い、平成２年度からは引き続き記念物保存修理事業（環境整備）に着手いたしました。

記念物保存修理事業（環境整備）の一環として行われている試掘調査は、尖石遺跡の整備計画を作成していく上での基礎的な調査として実施されているものであります。

その試掘調査も、今回で11回目となりました。平成10年度には、隣接する地にある尖石考古館の新築開館にあわせ、新たに国の特別史跡に追加指定された、従来与助尾根遺跡と呼ばれていた地区の調査も行っています。また、試掘調査に併せ、平成11年度には与助尾根地区のニセアカシアの伐採、復元住居の取り壊し、園路整備を行い、平成12年度には同じく与助尾根地区での復元住居６棟の建設、172本の落葉広葉樹の植栽を行い、史跡公園としての整備を尖石地区に先行して行いました。

試掘調査は、その後も継続して行っており、平成13・14年度には尖石遺跡の南側と西側の試掘調査を行いました。この地区は、宮坂英弐氏も調査を行っていない箇所であり、これまでの周辺の試掘調査の結果からも、多くの遺構の検出が見込まれるところでしたが、予想を遙かに上回る遺構の検出がありました。

今年度は、考古館の南側の試掘調査を行っています。今回は、住居址の検出は少なかったものの、多くの土坑群や列石が出土し、尖石遺跡の集落の様子が少しずつ明らかになってきました。

夏から秋にかけて行う尖石遺跡の試掘調査は、毎年、尖石縄文考古館に来館する多くの方たちに、館内の展示だけでなく、発掘調査を見学できる場として生かされていますが、今年度は「茅野市5000年　尖石縄文まつり'03」でも公開し、多くの市民に見ていただくことができました。

こうした調査成果をふまえ、今後の史跡整備に一層の努力をして参る所存でありますので、皆様の一層のご協力をお願いいたします。

最後に、この事業の実施にあたってご指導いただいた文化庁、長野県教育委員会をはじめ、調査に参加された関係者の皆様に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

平成16年３月

茅野市教育委員会

教育長　両角　源美

例言・凡例

1．本書は、特別史跡尖石石器時代遺跡記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書である。
2．試掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3．試掘調査は、平成15年６月18日から10月31日まで行った。
整理作業は、平成15年11月１日から平成16年３月27日まで行った。
4．出土品の整理及び報告書の作成は、尖石縄文考古館で実施した。
本報告書に係る出土品・諸記録は、尖石縄文考古館に保管している。
5．本報告書の執筆は、小林深志が行った。
6．本文中、宮坂氏の報告書とあるのは、昭和32年刊行『尖石』（茅野町教育委員会）のことである。また、図中、「○住」とあるのは○号住居址、「○土」とあるのは○号土坑の略である。図中、Pは土器を、Sは礫を、スクリーントーンは焼土を表す。遺構内の数字は、検出面からの深さを表す。
7．調査の体制
本調査は茅野市教育委員会が実施した。組織は以下の通りである。

特別史跡尖石石器時代遺跡整備委員会

特別委員

坪井　清足　（財団法人元興寺文化財研究所所長）

専門委員

戸沢　充則　（尖石縄文考古館名誉館長・明治大学名誉教授）
清水　　擴　（東京工芸大学教授）
土田　勝義　（信州大学教授）
亀山　　章　（東京農工大学教授）
佐々木邦博　（信州大学教授）
宮坂　光昭　（長野県遺跡調査指導委員）
小平　　学　（学識経験者）

指導助言

本中　　眞　（文化庁文化財保護部記念物課主任調査官）
上原　五夫　（長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課課長）

調査主体者

両角　源美　（教育長）

事 務 局

宮坂　耕一　（教育部長）
小平　廣泰　（文化財課長）
鵜飼　幸雄　（尖石縄文考古館長・史跡公園係長）

調査担当

小林　深志　（尖石縄文考古館学芸員）

発掘調査・整理作業協力者

牛尼チトセ　太田　義明　北沢　もと　北沢　祐子　北沢　洋子　栗原　　昇　小平千恵子
小平フサ子　武田ケサ子　田中洋二郎　東城久美子　長田　　真　林　　賢　藤森　栄子　山崎　裕子

目　　次

はじめに　　茅野市教育委員会 教育長　両角源美
例言・凡例
目　　次

第１章　調査の目的……1

第２章　調査の方法と経過……2
　第１節　調査の方法……2
　第２節　調査の経過……2

第３章　遺構と遺物……6
　第１節　調査区の概要……6
　第２節　検出された遺構……26

第４章　まとめ……43

図　　版
抄　　録

第１章　調査の目的

特別史跡尖石遺跡は、指定地の用地購入が終わった翌年の平成２年度から、国庫及び県費の補助を受け、記念物保存修理事業（環境整備）のため継続して試掘調査が行われ、今年度で11回目を迎えることとなった。過去10回の調査については、それぞれ試掘調査報告書が刊行されている。

今回調査を行ったのは、尖石地区の南東側である。この地区は、宮坂英弐氏が昭和17年に調査を行い、列石と共に多数の土坑を検出した箇所である。これまでの試掘調査の成果では、尖石地区からは多数の住居址が検出されているものの、拠点集落に通例な中央広場と考えられる場所が見つかっておらず、過去の調査例からしてこの箇所が最もその可能性のある所と考えられていた。中央広場と考えられるこの場所は、今後の尖石遺跡の整備を進めるにあたって、復元する集落の構造の検討や住居の時期選定に欠かせない重要な地点でもある。

この重要な地点の調査を行うにあたって、これまでの遺構の位置とプランを確認する作業、さらに遺構の時期を確認するための若干の上層の掘り下げだけでは、方形柱穴列などの土坑（柱穴）がセットとなるような遺構の存在を見過ごしてしまうとの考えから、土坑の集中する箇所は周辺も拡張し、遺構の性格を調査することとした。

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

平成２年度に試掘調査を開始するにあたって、尖石遺跡全体を大きく４つに分け、北西隅をⅠ区とし、時計回りにⅡ区、Ⅲ区、Ⅳ区と区画の名称をつけている。その区画ごとに遺跡範囲の全体を覆うように東西南北にあわせて大きく10m四方の大きな正方形のグリッドで区切り（大グリッド）、ｘ軸を大文字のアルファベット、ｙ軸を数字で呼称している。さらにその大グリッドを２ｍ四方の小さなグリッド（小グリッド）としてｘ軸を小文字のアルファベット、ｙ軸を数字で表し、合わせてⅠ区Ａ１ａ１のように呼称している。

今回調査の対象としたのは、遺跡の南東側である。前述したように、この場所は、かつて宮坂英弐氏が多くの住居址の発掘を目指しトレンチによる調査を行いながらも、住居址は確認できず、代わりに列石や多くの土坑を検出したところである。調査対象面積は約1,600㎡、調査面積は1/4の400㎡を予定した。

茅野市教育委員会で実施してきた試掘調査は、平成４年度に今年度調査地区の東側において遺跡の東端を確認する調査を行っているが、その調査でも、遺構は土坑が数基検出されただけで、住居址は検出されていない。

掘り下げにあたっては、できるだけ少ない調査面積で住居址等の遺構の検出がすべて把握できるように、グリッドの間隔が４ｍを越えないように設定した。

第２節　調査の経過

現状変更許可が下りた６月18日より基準杭測量・杭打ち作業、調査区の設定、機材搬入作業に入る。調査区の掘り下げに入ったのは、６月26日からで、設定した調査区の東側から行い、徐々に西側に進んでいった。

各調査区の掘り下げでは、昭和17年に宮坂英弐氏が調査を行ったトレンチの痕跡が見られる箇所があり、その確認状態の写真撮影を行った後、トレンチの掘り下げを行っていった。

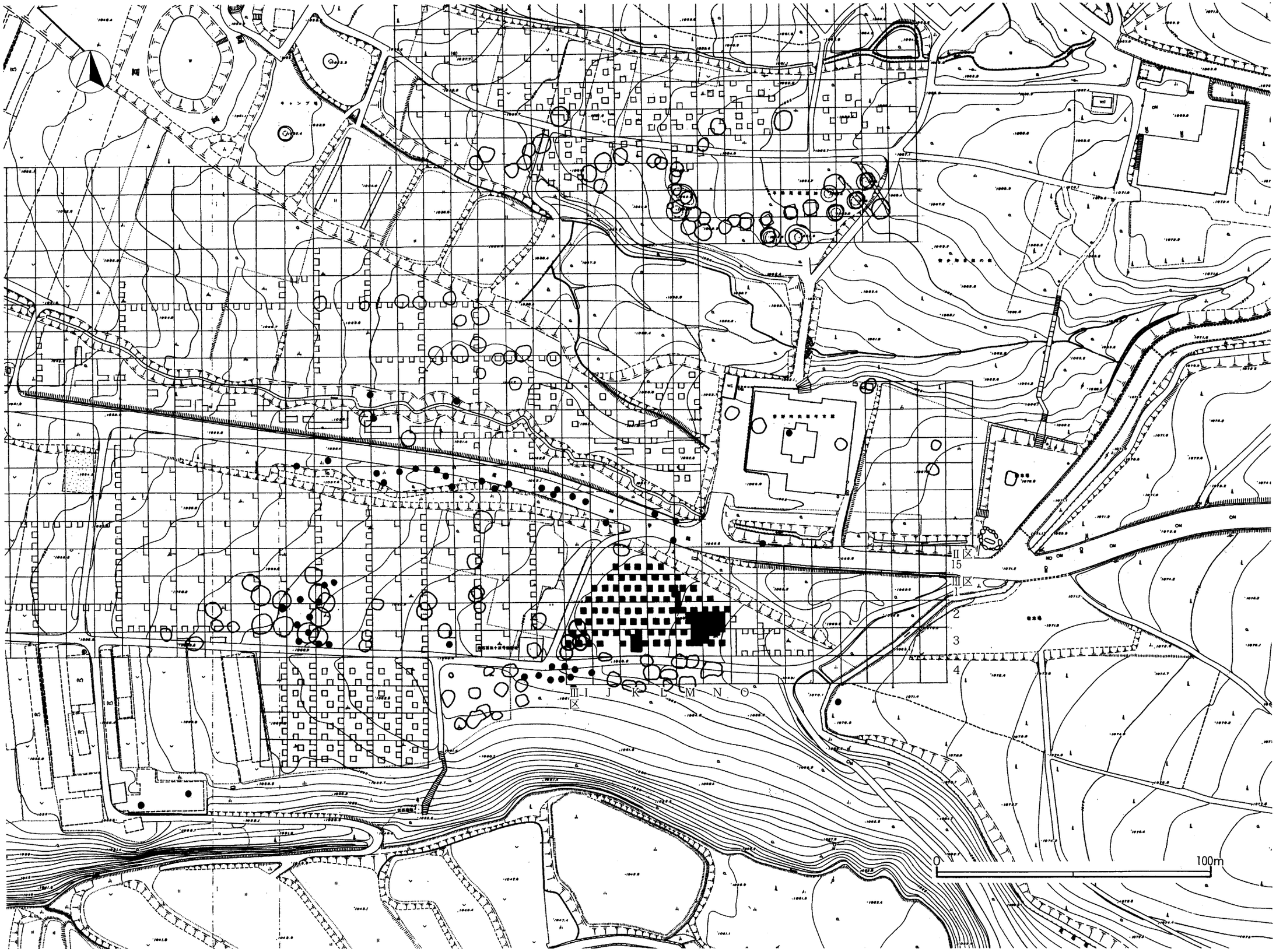
トレンチを掘り下げてみると、宮坂氏が確認し、拡張して掘り下げた土坑が検出される。これらの明らかに新しい埋め戻しと考えられる土坑については、土層断面図の作成を行わず、完掘を行っていった。また、トレンチに掛かりながら、掘り下げを行っていない土坑、あるいはトレンチに掛からなかったため未掘の土坑については、できるだけ半裁を行い、土層断面図の作成を行った後完掘した。平面径が小さく、完掘が難しい土坑については、少し掘り下げた状態で土層観察を行い、メモした後に完掘した。

未掘の土坑を半裁すると、その多くで柱痕が検出され、これらが柱穴であることが確認された。

７月15日になると、ⅢＭ１ａ５とＬ１ｅ３で、大きな礫が検出され始める。これが、調査を行っている列石になるものと考えられ、報告書の写真や図面との照合作業を行う。平成２年にかつて作成された全体図を地形図に落とし込む作業を行っているが、若干の誤差があるようである。

７月26日には、史跡整備委員会を開催し、現地視察を行った。その際、列石については、グリッドにより部分を確認するのではなく、全体を掘り出し、図化と写真撮影を行うよう指導を受ける。

８月６日には、ⅢＫ３ｃ３の園路北側で未発掘の住居址を検出する。改めて調査が終わっているＫ３ｅ３を精査したところ、西端で住居址の東側の掘り込み面を検出できた。住居址の大きさは、４ｍほどと小さいようである。



第１図　周辺の地形と発掘区（1/1500）

お盆明けの８月20日には、ⅢＪ１ａ３の表土層から黒曜石製のポイントが出土する。ⅢＩ３ａ３、Ｉ３ｃ３、Ｉ３ｄ１では宮坂氏の調査した21～25号住居址と考えられる調査済み住居址の一部が検出される。

８月27日からは、ⅢＫ３ｃ３で検出した住居址を掘り下げるため、Ｋ３ｃ２、Ｋ３ｃ４、Ｋ３ｄ２、Ｋ３ｄ３、Ｋ３ｄ４を拡張して掘り下げることとする。

８月29日からは、東側の柱穴群の調査のため、Ⅲ区Ｍ２・Ｍ３・Ｎ２・Ｎ３の内、134㎡の範囲について面的な調査を行えるよう、廃土の取り除きと拡張しての掘り下げに入る。

９月26日には、文化財保存全国協議会の視察。

10月11日・12日の両日は、尖石縄文考古館と遺跡を中心とした「茅野市5000年　尖石縄文まつり’03」が開催されたが、その際に、発掘現場の公開と説明を行った。

調査した土坑群の平面実測図、及び断面図作成のための計測を継続して行い、10月24日には清掃と個々の土坑の写真撮影、土坑群の全景写真撮影を行い、現地での調査を終了する。

埋め戻しは、翌10月25日に重機により行った。また、発掘機材の搬出は11月５日に行い、遺跡内でのすべての作業を終了した。

第３章　遺構と遺物

今回検出・確認した遺構は、住居址６軒、土坑258基、列石１である。

以下、掘り下げを行った調査区について、西側より記述し、次節で拡張区における遺構の検出状況を詳述する。

第１節　調査区の概要

ⅡＪ15ｅ４（第２図、図版２－１）

表土層の後、黒褐色土、暗褐色土と掘り下げ、ローム漸移層まで掘り下げを行った。南西隅の柱穴状の遺構（110号土坑）は、深さが50cmある。調査区の西側中央の小さな掘り込み（109号土坑）は、深さが11cmほどしかないが、焼土を伴っている。南側中央の遺構（111号土坑）は、深さが14cmである。

ⅡＫ15ｂ４（第２図）

表土層から続く黒褐色土、暗褐色土を取り除くと、南西隅に掘り込み（112・113号土坑）が検出された。掘り進めると、どちらも柱穴状の掘り込みとなった。深さは掘り込み面であるローム漸移層から40～50cmである。

ⅡＫ15ｄ４（第２図）

表土層、暗褐色土と掘り下げると、北東隅に深さ23cmの小さな柱穴状の掘り込み（114号土坑）が検出された。

ⅡＬ15ａ４（第２図、図版２－２）

表土層を取り除くと、北側に東西に走るトレンチの痕跡を検出した。さらに掘り下げていくと、中央やや南側に径50cm、深さ23cmの遺構（115号土坑）を検出した。掘り込み面の位置によっては深さ50cmほどの柱穴となろうか。

ⅡＬ15ｃ４（第２図、図版２－３）

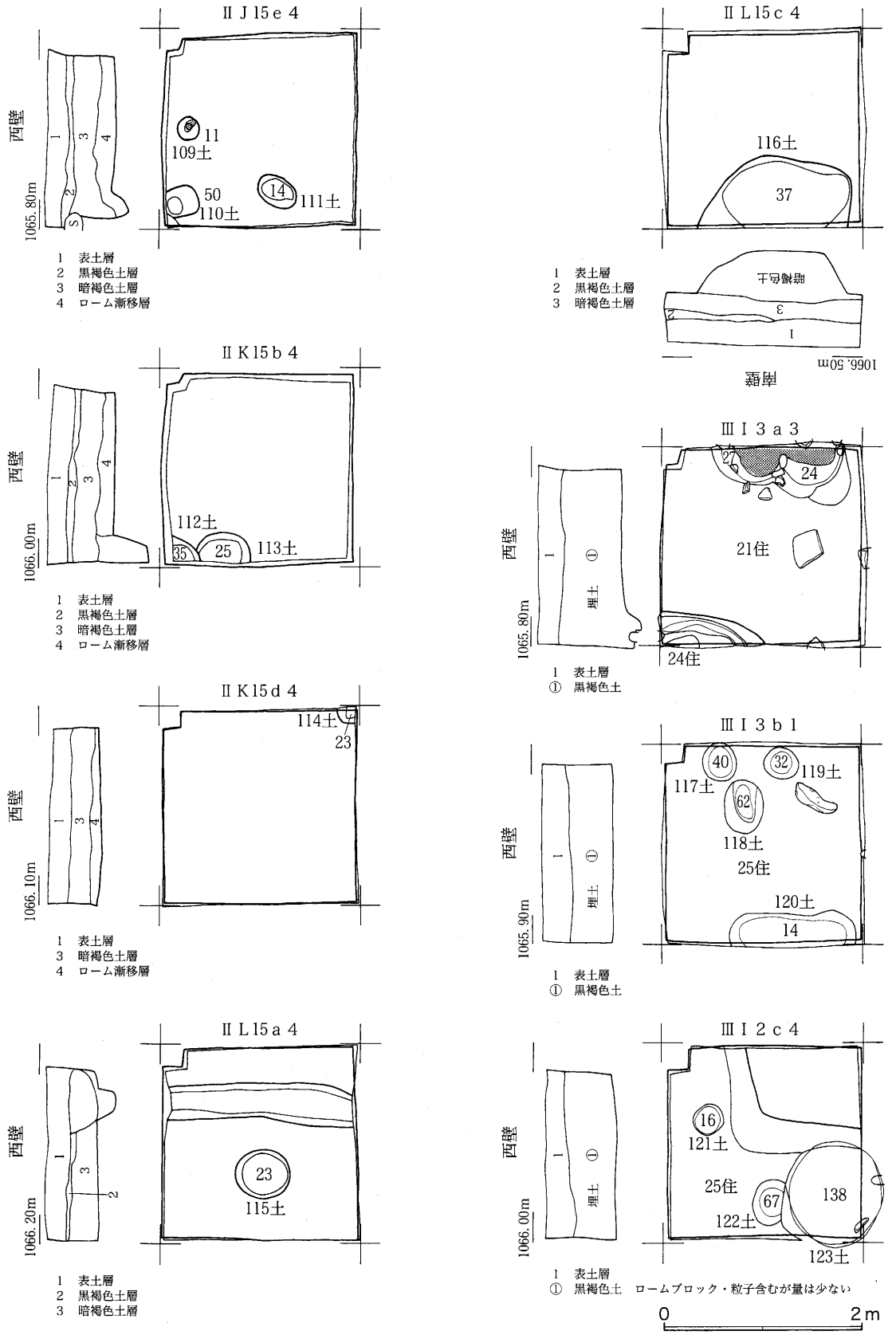
表土層以下、黒褐色土、暗褐色土と掘り進み、ローム漸移層面で調査区の南側で遺構（116号土坑）を検出した。覆土は、ロームブロックが混じる暗褐色土で、よく締まっており、未調査の遺構である。

ⅢＩ３ａ３（第２図、図版２－４・５）

表土層を取り除くと、約60cmの深さで黒褐色の埋め戻しを行った土層が堆積しており、平坦で硬くよく締まった住居址の床面が現れ、北壁際に礫を抜かれていると考えられる炉址が検出された。また、南壁際には別の住居址の周溝と考えられる掘り込みが検出されている。周辺の調査区との関連から、これらの住居址は、昭和17年に宮坂英弍氏の調査したもので、炉址と床面が21号住居址の一部、南壁際の周溝が24号住居址の北端であることが明らかとなった。21号住の床面には平坦な礫が置かれているが、これは報告書に記載されているものがそのまま残されたものである。この他、住居址内からは、わずかに縄文土器片などの遺物が出土しているが、これらは埋め戻しの際に紛れ込んだもので、原位置を表しているものではない。

ⅢＩ３ｂ１（第２図、図版２－６）

表土層を取り除くと、埋め戻しを行ったと見られる黒褐色土が40cm余り堆積し、平坦で硬くよく締まった住居址の床面が現れる。この床面を伴う住居址は、昭和17年に宮坂氏の調査した25号住居址の床面になると考えられる。北側に３基の柱穴状の掘り込み（117～119号土坑）、南側に１基の長円形の掘り込み（120号土



第２図　検出された遺構と土層堆積状態(1)（1/60）

坑）が検出された。また、床面に長さ50cmほどの礫が出土している。宮坂氏の報告書の挿図にある礫と同一であると判断されるが、向きが変わっているため、原位置を止めていないと考えられる。

Ⅲ Ⅰ ２ｃ４（第２図、図版２－７）

35cmほどの表土層を掘り下げると、調査区の北東1/4だけにローム漸移層が残っており、残り3/4は埋め戻した黒褐色土で、ロームブロックやローム粒子を含むが量は少ない土層であった。その埋土は50cmほどであるが、その面まで掘り下げると、いくつかの遺構が検出された。南東隅の123号土坑（図版２－８）とその北側にある壁面は、宮坂氏の報告書にある25号住居址の北壁とその内側の土坑であると考えられるが、深さは報告書によると70cmとあるが、実際は138cmある。土坑の上面は埋め戻した土で掘り下げ中に崩落してしまうほど脆弱であったが、下半は土層が締まっていた。掘り下げ途中でやめてしまったものであろうか。この土坑の西に接して、径45cm、深さ67cmの柱穴状の掘り込み（122号土坑）がある。また、調査区の北西には径30cm、深さ16cmの柱穴状の遺構（121号土坑）もあるが、宮坂氏の報告書にも記載が無く、新しく検出した遺構である。25号住居址の壁は調査区の中央付近で北上するが、これについては、新たな遺構になるのではないかと思われる。しかし、周辺の調査区の掘り下げでは、確認できなかった。

Ⅲ Ⅰ ３ｃ３（第３図、図版３－１）

表土層を取り除くと、調査後埋め戻されたと分かる土層が約50cmにわたり堆積しており、その下は平坦でよく締まった住居址の床面であった。調査区の東側にはやや窪んだ炉址があり、周辺には礫を抜き取ったと考えられる小さな穴が回っていた。焼土はこの炉址内からさらに南側へと続いている。この炉址を切って、周溝が調査区の東壁中央から北壁中央へ抜けている。炉は宮坂氏が昭和17年に調査した23号住居址に、周溝はⅢⅠ３ｄ１やⅢⅠ３ｅ３でも確認された22号住居址の南西隅にあたるものであろう。調査区の中央から西壁中央にかけても周溝の一部と考えられる溝が走っているが、宮坂氏の調査した21号住居址から25号住居址までの遺構配置の中ではどれも位置的にはずれており、この溝の北ないし南に新たな住居址が存在した可能性も残されている。

Ⅲ Ⅰ ２ｄ２（第３図）

表土層を取り除くと、調査区の中央を東西に走るトレンチ痕と東半が一段深くなっている掘り込みを検出した。さらに掘り下げると、深さ10～20cmの柱穴状のピットが４基検出された（126～129号土坑）。いずれも調査済みのものである。遺物は、暗褐色土の残る北西隅と南西隅で、縄文土器片と石片がわずかに出土しただけである。

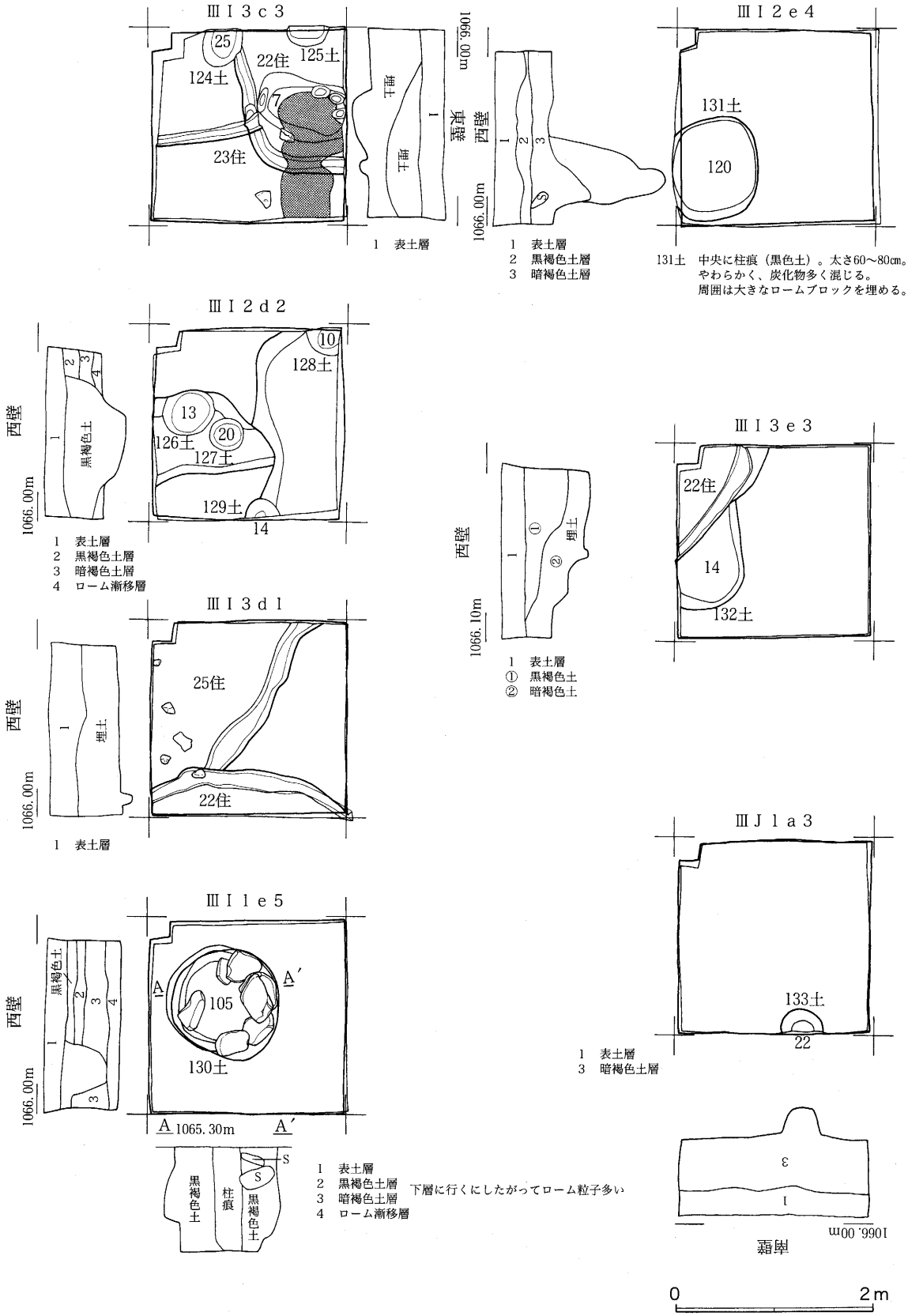
Ⅲ Ⅰ ３ｄ１（第３図、図版３－２）

表土層を取り除くと、南壁際に沿って住居址と考えられる掘り込みが検出された。覆土は調査後埋め戻されたもので、遺物等の出土はないが、壁際では周溝も検出されている。この住居址と切り合うように、中央を南北に走る浅い掘り込みがある。はっきりとした掘り込みではないが、この溝の東西にはあまりレベルの差はないが、西側の方が若干低い。また、周溝の東側には、ローム漸移層が残っており、西側にはないことから、西側に遺構が広がっており、この溝が住居址の周溝であることが理解される。

これらの住居址は、昭和17年に宮坂氏の調査したもので、南側の住居址が22号住居址、西側の住居址が25号住居址になるものと考えられる。

Ⅲ Ⅰ １ｅ５（第３図、図版３－３）

表土層を取り除くと、南側に東西に走るトレンチ痕を検出したが、さらに掘り下げていくと、中央に遺構（130号土坑）が検出された（図版３－４）。平面形はほぼ円形で、径110cmを計る。深さはローム面から105



第３図　検出された遺構と土層堆積状態(2)（1/60）

cmである。遺構の掘り下げを開始してすぐに径30～40cmある礫が多数出土し始めるが、遺構の中央からは出土しない。半裁状態による覆土の観察でも、30cmほどの柱痕が検出されたが、礫のない空間の長さを計測すると35～45cmあるので、それくらいの太さの柱を建て、周辺に礫を充填したものであろう。礫の充填は遺構の中程までで終わっている。なお、周辺の調査区では同様の柱穴は見つかっていないので、建物址に伴うものではなく、単独のものであった可能性もある。

Ⅲ Ⅰ ２ ｅ ４（第３図）

表土層を取り除くと黒褐色土、暗褐色土と続く。ローム漸移層面で、調査区の南西隅に径100cm、深さ120cmの遺構（131号土坑）が検出された。この土坑は、中央に柱痕が確認できたことから、柱穴と考えられる。柱痕は黒褐色土で、炭化物が多く混じる。柱痕の太さは、60～68cmである。坑底からは長さ20cmほどの礫が出土している。周辺の埋土は大きなロームブロックである。

Ⅲ Ⅰ ３ ｅ ３（第３図、図版３－５）

表土層を取り除くと、北西隅に掘り込みが検出された。覆土は調査後に埋め戻しが行われたものであり、遺物の出土はなかったが、壁際には周溝も検出されている。周辺の調査区で検出された遺構との関連で、この住居址は昭和17年に宮坂氏の調査した22号住居址の南東隅にあたると考えられる。住居址と重複し、その南側に浅い落ち込み（132号土坑）があるが、壁面や底面は凹凸が激しく、人為的なものとは考えられない。

Ⅲ Ｊ １ ａ ３（第３図）

表土層を取り除くと、暗褐色土となる。暗褐色土を掘り下げていくと、50点余の縄文土器片と石片が出土したが、遺構に伴うものではなさそうである。また、表土層中からであるが、黒曜石製のポイント（図版15－８）が出土している。南壁際で柱穴状の遺構（133号土坑）を検出したが、深さはローム漸移層から22cmである。

Ⅲ Ｊ ２ ａ ２（第４図）

表土層を取り除くと、調査区の西半分に黒褐色で１cm以内のロームブロックやローム粒子を含む埋土が現れる。掘り進めると、深さが10cmから18cmの浅い遺構（134～137号土坑）が検出される。遺物は東側の未掘の部分から縄文土器片や石片が出土するが、量は少ない。南壁際中央に礫が重なり合うように出土している。

Ⅲ Ｊ ３ ａ １（第４図、図版３－６）

表土層を取り除くと、北西隅と南東隅で、柱穴状の遺構（138～142号土坑）が検出された。深さは21cmから45cmである。

Ⅲ Ｊ １ ｂ ５（第４図）

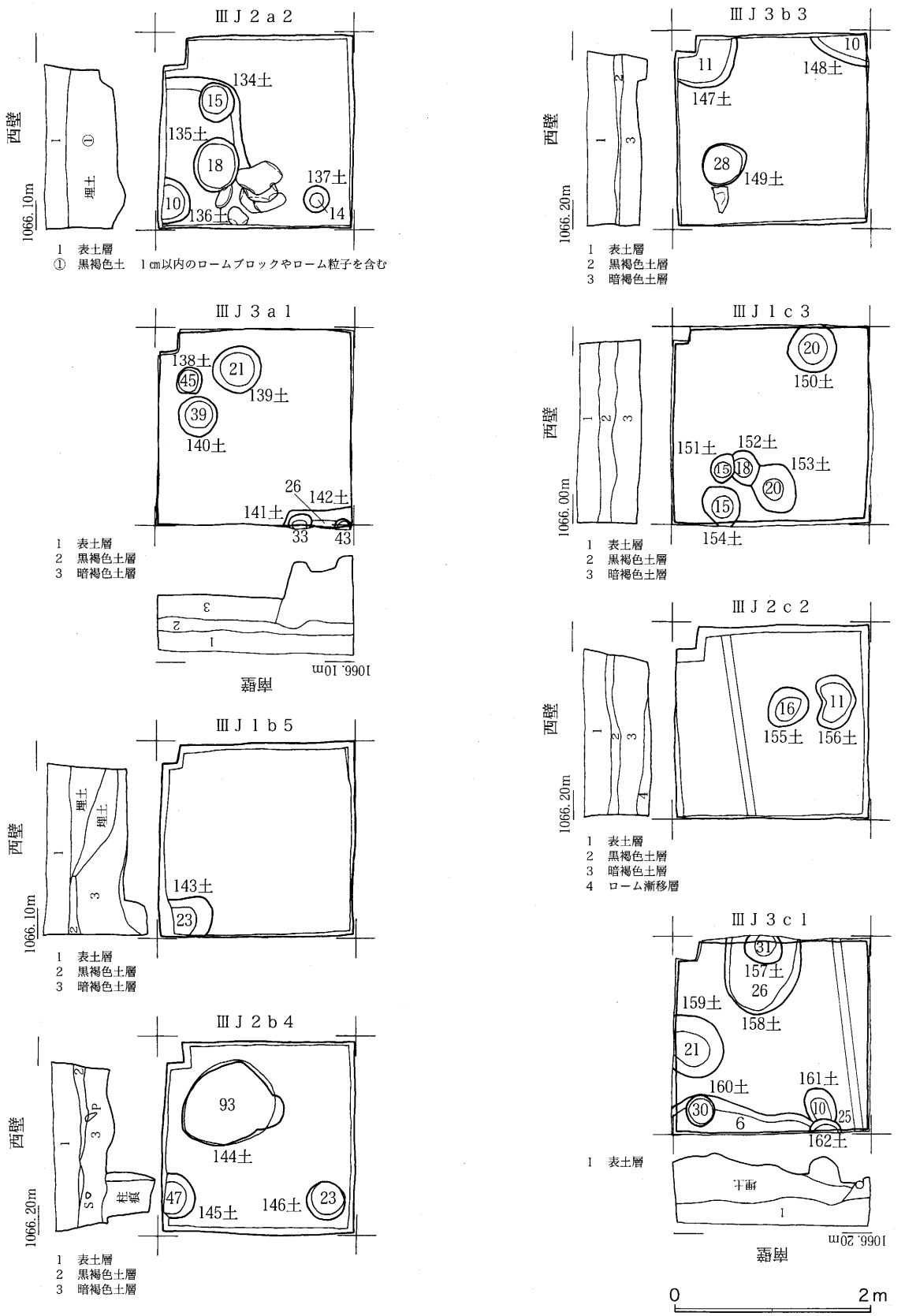
表土層を取り除くと、調査区の北側に東西に走るトレンチ痕が検出された。さらに暗褐色土を掘り下げていくと、南西隅に深さ23cmの遺構（143号土坑）が検出された。遺物は第２層である黒褐色土層中から縄文土器片や石片が出土したが、数は少ない。

Ⅲ Ｊ ２ ｂ ４（第４図）

表土層を取り除いた後、黒褐色土、暗褐色土を掘り下げていくと、北西側に、径が75cmから95cm、深さ93cmの土坑（144号土坑）を検出した。東側に張り出しがあるが、別の柱穴が重複しているものと考えられる。他に、南西隅と南東隅で柱穴状の遺構を検出している。深さは南西隅のもの（145号土坑）が47cm、南東隅のもの（146号土坑）が23cmである。

Ⅲ Ｊ ３ ｂ ３（第４図、図版３－７）

表土層を取り除くと、暗褐色土中から礫が出土する。さらに掘り下げていくと、北西隅（147号土坑）、北



第４図　検出された遺構と土層堆積状態(3)（1/60）

東隅（148号土坑）に深さ10cmほどの掘り込みが検出された。暗褐色土中からの掘り込みであろうが、土層観察により分層することはできなかった。礫の近くで検出された柱穴状の遺構（149号土坑）は、ローム漸移層からの深さが28cmある。

Ⅲ Ｊ １ ｃ ３（第４図、図版３－８）

表土層の下には他の調査区よりやや厚く20cmほどの黒褐色土が堆積しており、その下が暗褐色土となる。ローム漸移層まで掘り下げると、北壁際に１基（150号土坑）、南側に４基の柱穴状の遺構（151～154号土坑）が検出された。深さは15cmから20cmと浅い。遺物は、暗褐色土層中から20点ほどの縄文土器片や石片が出土しているが、遺構の中とはならないであろう。

Ⅲ Ｊ ２ ｃ ２（第４図）

表土層を取り除くと、黒褐色土、暗褐色土、ローム漸移層と続く。調査区内を南北に灌水パイプが埋設されているが、そのほかに荒らされた形跡はない。東側に２基の小さな遺構（155・156号土坑）があるが、深さは11cmから16cmと浅い。

Ⅲ Ｊ ３ ｃ １（第４図、図版４－１）

表土層を取り除くと、東側に南北に灌水パイプが埋設されている。調査区の南側には一度掘り下げた痕跡が見られる。ローム漸移層まで掘り下げると、北側、西壁際、南東隅に遺構（157～162号土坑）が検出された。深さは10cmから30cmである。

Ⅲ Ｊ １ ｄ １（第５図）

表土層以下、黒褐色土層、暗褐色土層と掘り下げていくと、南西隅で礫が出土した。その後、ローム漸移層まで掘り下げると、北西隅、西壁中央で掘り込みが検出された。北西隅の遺構（163号土坑）は深さ10cm、西壁際の遺構は３基が重複しており（164～166号土坑）、深さ12～27cmある。

Ⅲ Ｊ １ ｄ ５（第５図）

表土層を取り除いた後、黒褐色土、暗褐色土と掘り下げ、ローム漸移層面で、北西隅に柱穴状の遺構（167号土坑）を検出した。深さは14cmである。

Ⅲ Ｊ ２ ｄ ４（第５図）

表土層を掘り下げた後、黒褐色土、暗褐色土と掘り下げていったが、遺構は検出されなかった。

Ⅲ Ｊ １ ｅ ３（第５図）

表土層を取り除くと、黒褐色土、暗褐色土と続く。ローム漸移層まで掘り下げを行ったが、遺構の検出はなかった。遺物は、暗褐色土層中から７点の縄文土器片、石片の出土があった。

Ⅲ Ｊ ２ ｅ ２（第５図）

表土層を取り除くと、黒褐色土、暗褐色土、ローム漸移層と続く。遺物の出土はなく、遺構の検出もなかった。

Ⅲ Ｊ ３ ｅ １（第５図）

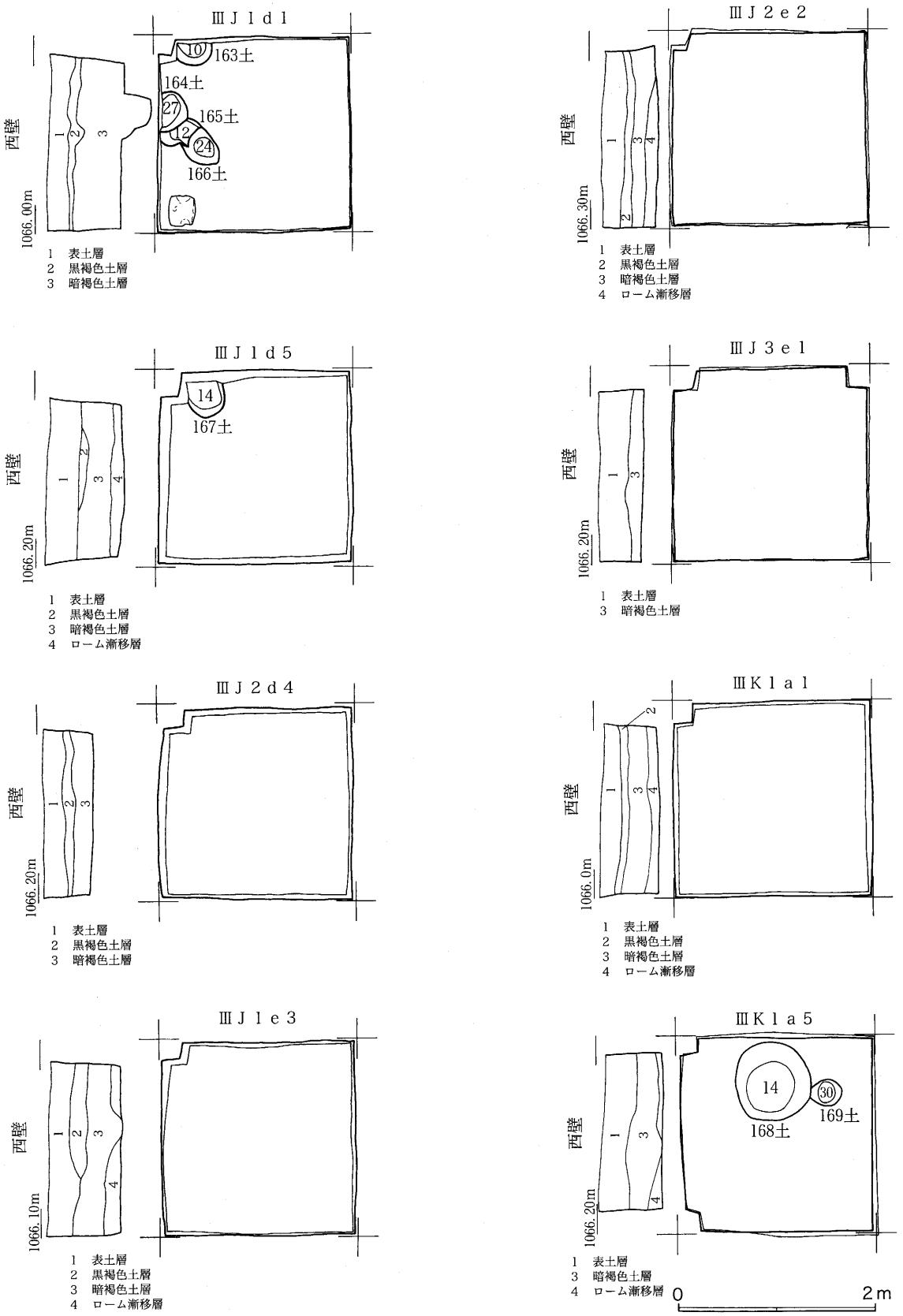
表土層に続いて暗褐色土、ローム漸移層まで掘り下げるが、遺構の検出はなかった。

Ⅲ Ｋ １ ａ １（第５図）

調査区内をローム面まで掘り下げたが、遺構の検出はなかった。

Ⅲ Ｋ １ ａ ５（第５図）

表土層から続く暗褐色土を掘り下げたところ、調査区の北側で径75～80cm、深さ14cmの掘り込み（168号土坑）と、径30cmで、深さも30cmの掘り込み（169号土坑）が検出された。遺物は縄文土器片が１点出土しただ



第５図　検出された遺構と土層堆積状態(4)（1/60）

けである。

ⅢＫ２ａ４（第６図）

表土層から続く黒褐色土を取り除き、暗褐色土を掘り下げていくと、北側で礫が３点出土した。周辺の調査区では礫は出土していないため、性格は不明である。

ⅢＫ３ａ３（第６図、図版４－２）

表土層から続く黒褐色土、暗褐色土を掘り下げたところ、北壁際と南東、南西隅に掘り込みが検出された。北壁際の掘り込みは３基の土坑が重複していると考えられる。中央（171号土坑）が最も深く、深さ42cm、西側（170号土坑）が13cm、東側（172号土坑）が21cmを計る。調査区の南東にある土坑（173号土坑）は、平面形が長方形で、北側底面に礫が検出されている。深さが42cmで、底面が平坦であるので、１つの土坑としたが、２基の柱穴が重複している可能性もある。南西隅の掘り込み（174号土坑）は、凹凸が激しく深さも16～19cmであるので、人為的な遺構としないほうがよいと思われる。

ⅢＫ１ｂ３（第６図）

表土層を取り除くと、中央を東西に走る宮坂氏の調査したトレンチが検出される。その検出面である暗褐色土層上面でははっきりしなかったが、ローム面まで掘り下げたところ、深さが６cmから23cmある柱穴状の掘り込みがいくつか検出された（175～180号土坑）。

ⅢＫ２ｂ２（第６図）

表土層を取り除いた後、黒褐色土、暗褐色土と掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

ⅢＫ３ｂ１（第６図、図版４－３）

表土層を取り除くと、北壁際に掘り込み（181・182号土坑）が検出された。掘り下げると、宮坂氏が調査したトレンチとそれに掛かる掘り込みで、覆土は分層できたが、どちらも柔らかく、調査終了後に埋め戻したものと理解された。南側に一段高いところがあるので、２基の土坑の重複であったと考えられるが、埋め戻したものであるため、新旧関係は明らかでない。

ⅢＫ１ｃ１（第６図）

調査区の南西にトレンチの痕跡を確認したほか、東壁際で深さ16cmの柱穴状の掘り込み（183号土坑）を検出した。遺物は30点余りの縄文土器片や石片であるが、多くがトレンチ内からの出土で、原位置を止めていない。

ⅢＫ１ｃ５（第６図）

表土層以下、黒褐色土層、暗褐色土層と掘り進め、ローム漸移層まで掘り下げた。北壁際に深さ16cmほどの掘り込みがあるが、表土層直下から掘り込まれており、宮坂氏の調査したトレンチになるのではないかと考えられる。

ⅢＫ２ｃ４（第６図）

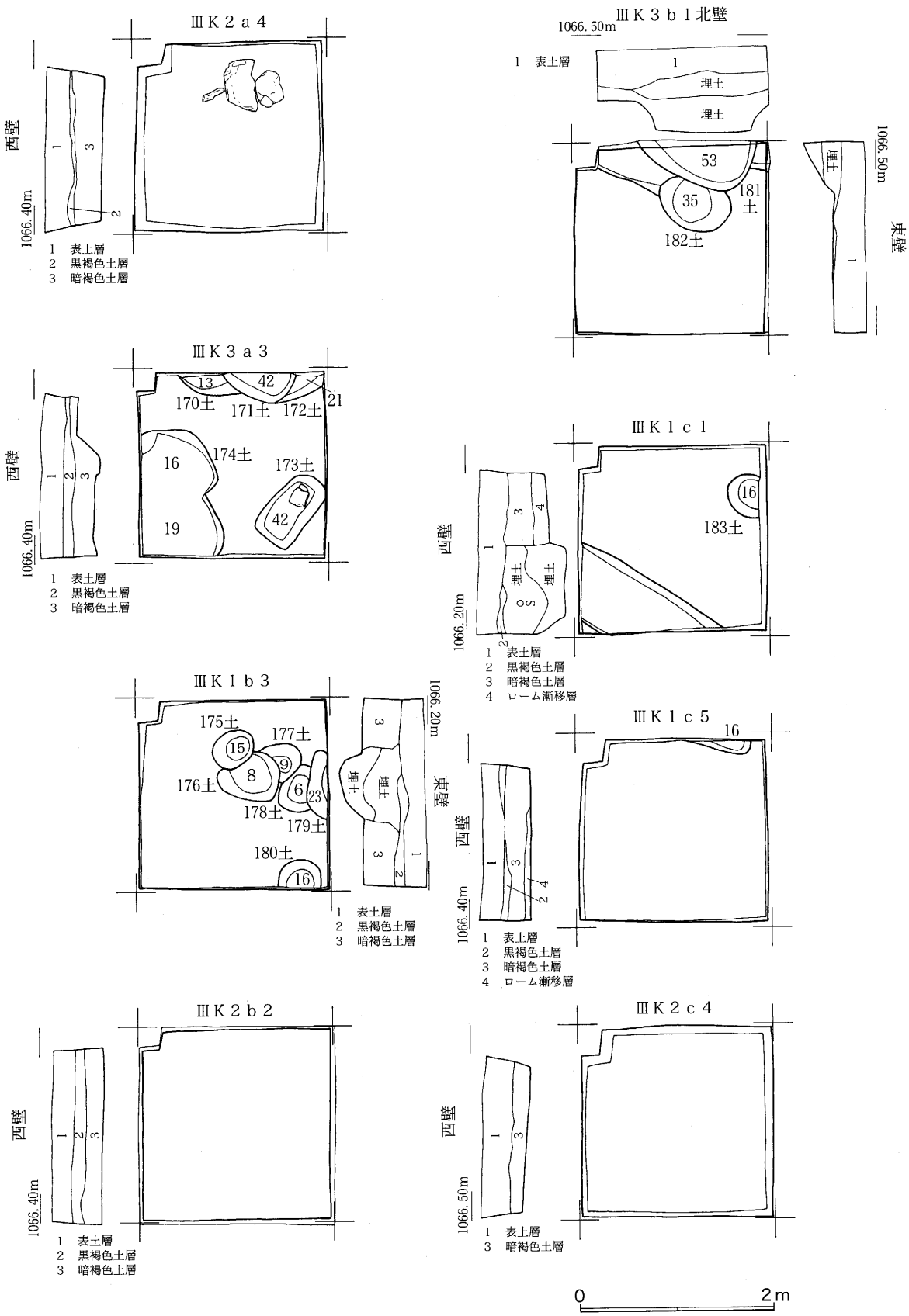
表土層を取り除いた後、暗褐色土をローム漸移層まで掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

ⅢＫ３ｃ２（第７図）

本調査区の南側で住居址（35号住居址）が検出されたため拡張した。中央東寄りで、深さ11cmの遺構（184号土坑）が検出された。

ⅢＫ３ｄ１（第７図）

表土層を取り除くと、南東隅に掘り込み（188号土坑）が確認されたが、これは宮坂氏が調査したもので、埋め戻しを行っていることが確認された。さらに暗褐色土を掘り下げていくと、北壁際に１箇所（186号土



第６図　検出された遺構と土層堆積状態⑸（1/60）

坑）と、中央やや西側に１箇所（187号土坑）の２基の遺構が検出された。どちらも深さは20cmほどで未調査であった。

ⅢＫ３ｄ２（第７図）

本調査区の南側で住居址（35号住居址）が検出されたため拡張した。中央西寄りで、深さ10cmの小さな遺構（185号土坑）が検出された。

ⅢＫ３ｃ３（第13図）

表土層を取り除くと、北側に東西に走るトレンチの痕跡が検出できた。さらに掘り下げを行ったところ、南東に掘り込まれた住居址を検出した。これは未調査の住居址である。これにより周辺を拡張したが、住居址については別に詳述する。住居の外側に深さ13cmの小さな遺構（247号土坑）が検出されたが、住居址との関係は明らかでない。

ⅢＫ１ｄ３（第７図）

表土層を取り除いた後、黒褐色土、暗褐色土と掘り下げていくと、北西隅で深さ20cmの遺構（189号土坑）を検出した。遺物の出土はなかった。

ⅢＫ２ｄ２（第７図）

表土層以下、黒褐色土、暗褐色土、ローム漸移層と掘り下げていったが、遺構の検出はなかった。

ⅢＫ１ｅ１（第７図、図版４－４）

表土層を取り除くと、東西に走るトレンチの痕跡が確認された。さらにローム漸移層まで掘り下げると、調査区の南西に深さ20cm余の土坑が２基検出された（190・191号土坑）。

ⅢＫ１ｅ５（第７図）

表土層を取り除くと、北西隅に暗褐色土を掘り込み面とし、ロームブロックの混じる漆黒土を覆土とする掘り込みが検出された。トレンチの一部になるのではないかと考えられる。

ⅢＫ２ｅ４（第７図）

表土層を掘り下げると、北側にトレンチの痕跡が確認された。さらに掘り下げを行ったが、それ以外の遺構の痕跡はなかった。

ⅢＫ３ｅ３（第８図）

表土層を掘り下げると、東西に幅50cmほどの溝状の痕跡が確認された。掘り下げすぎてしまったため、東西に分断してしまったが、宮坂氏の調査したトレンチであることは明らかである。これ以外に遺構はないものとして一旦調査を終了したが、その後ⅢＫ３ｃ３において住居址（35号住居址）が確認されたため、精査を行い、西壁際で同じ住居の東端になると考えられる掘り込みを確認した。このため、南側の調査区であるⅢＫ３ｅ４を拡張した。また、本調査区の南東で、新たに２基の遺構を検出した（193・194号土坑）

ⅢＬ１ａ３（第８図）

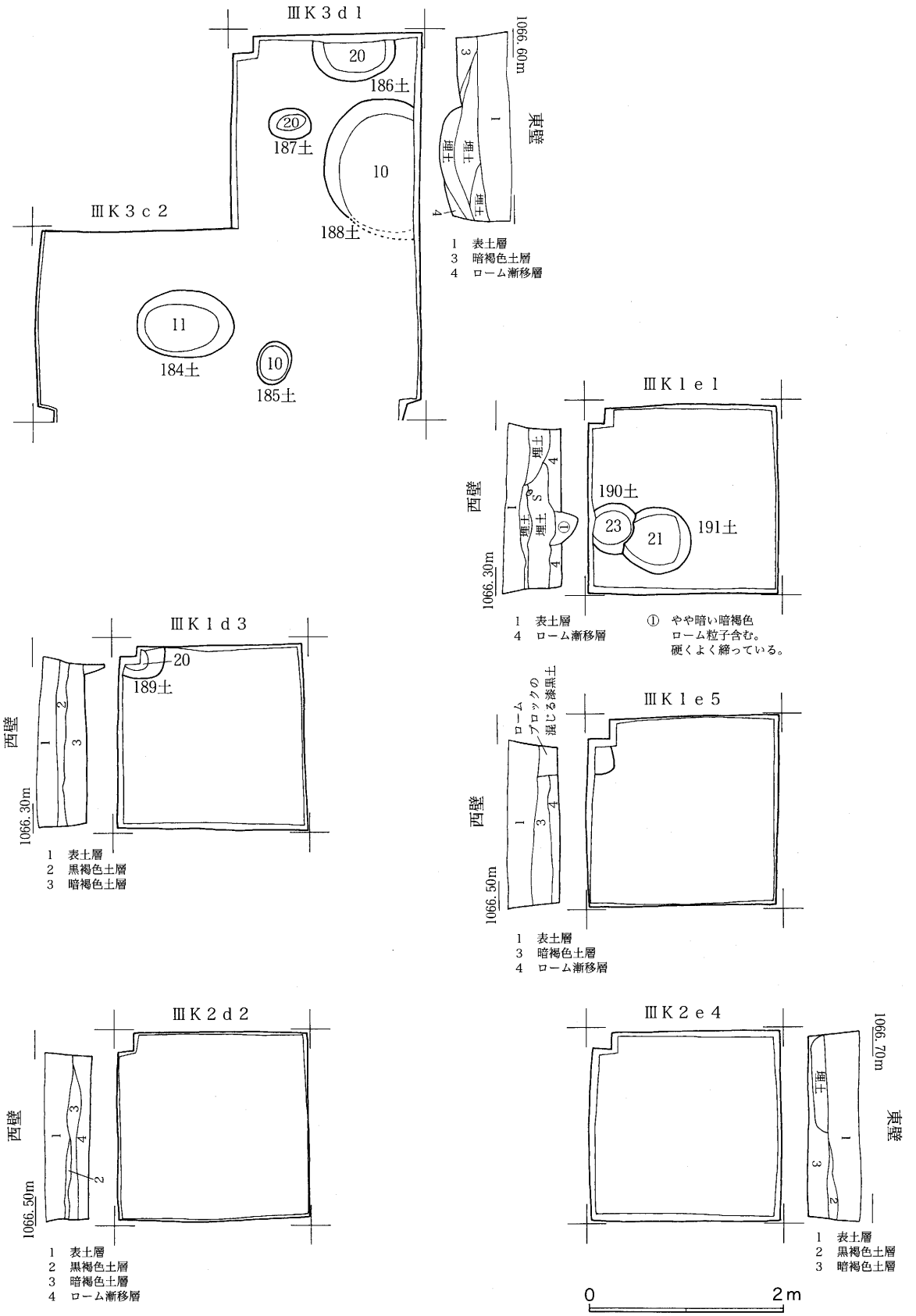
表土層を掘り下げると、中央やや北寄りにトレンチの痕跡が検出された。このトレンチ以外に本調査区では遺構は検出されなかった。

ⅢＬ２ａ２（第８図）

表土層を取り除くと、北側に東西に走る溝状の遺構が検出された。時期は新しいと思われるが、幅が狭く、宮坂氏の調査したトレンチ痕であるかは明らかでない。

ⅢＬ３ａ１（第８図）

表土層を取り除いたところで、中央を東西に走るトレンチの痕跡を検出した。調査区の北西隅に、トレン



第７図　検出された遺構と土層堆積状態⑹（1/60）

チに掛かり、柱穴状の掘り込み（195号土坑）が検出されたが、調査済みのものである。

ⅢＬ１ｂ１（第８図、図版４－５）

表土層を取り除いたところで、南西隅に埋め戻したようなローム層の堆積があったが、15cmほどで、暗褐色土となり、未調査の遺構がいくつか検出された。南壁際中央の遺構は、底面が２段となっており、２基の遺構（200・201号土坑）の重複であろう。南西隅の遺構（199号土坑）は、写真撮影時には検出できていなかったが、さらに精査を行った結果、掘り込みであることが確認された。確認面からは25cmほどであるが、壁面の土層観察では40cm以上あったことが理解される。他に３基の掘り込み（196～198号土坑）が検出されているが、壁面や底面がしっかりしておらず、人為的なものか疑わしい。

ⅢＬ１ｂ５（第８図）

表土層を取り除くと、中央に東西に走る溝の痕跡を検出した。この溝は挿図や写真では東壁にまではいたらず途中で消滅しているが、東壁では観察できることから、浅いために周辺を掘りすぎた結果であり、ⅢＬ１ｄ５ではその続きが検出されている。この溝は、覆土の様子から宮坂氏の調査したトレンチではなく、耕作の畝になるのではないかと考えられる。

ⅢＬ２ｂ４（第８図）

表土層を取り除くと、北側に東西に走るトレンチの痕跡を検出した。さらに全面をローム面まで掘り下げたが、他の遺構を検出することはできなかった。

ⅢＬ３ｂ３（第８図）

表土層を取り除いたところで、中央を東西に走るトレンチの痕跡を検出した。このトレンチ以外に、遺構の検出はなかった。

ⅢＬ１ｃ３（第９図）

表土層を取り除くと、北側に東西に走るトレンチの痕跡が検出された。さらに掘り下げていくと、北東隅に向かってゆるやかに傾斜する掘り込み（202号土坑）が検出されたが、倒木痕のようなもので、人為的ではないと思われる。

ⅢＬ２ｃ２（第９図）

表土層を掘り下げると、調査区の北側に東西に走るトレンチの痕跡が確認された。さらにローム面まで掘り下げを行ったが、このトレンチ以外に遺構を検出することはできなかった。

ⅢＬ３ｃ１（第９図、図版４－６）

表土層を掘り下げると、調査区の南側に東西に走るトレンチの痕跡が確認された。トレンチの中とトレンチに掛かるように礫が出土しているが、原位置にあったものか明らかでない。また、調査区の南西隅に、トレンチに掛かる土坑（203号土坑）が検出されたが、これは調査済みのものである。

ⅢＬ１ｄ１（第９図）

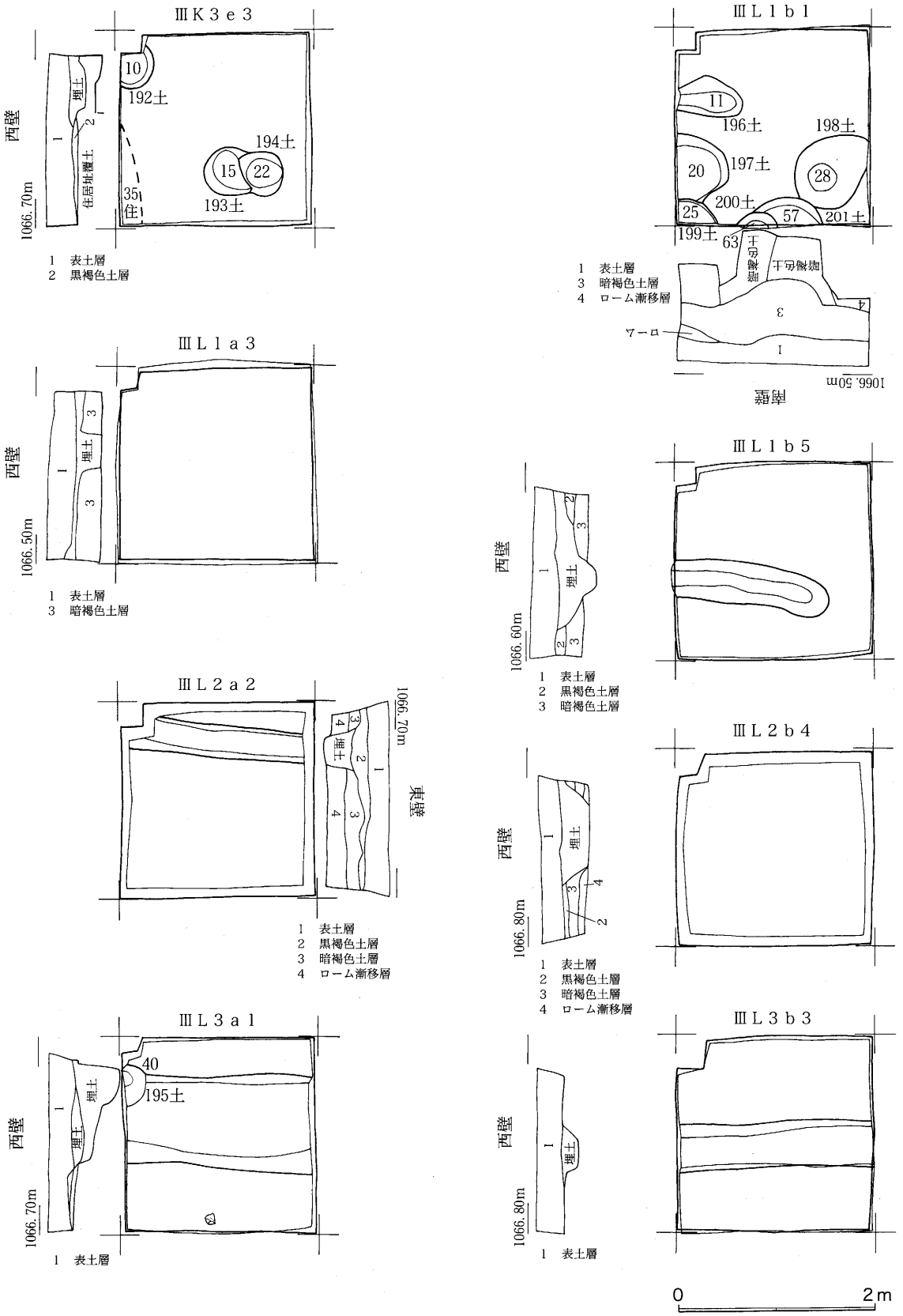
表土層を掘り下げると、西壁際に埋め戻した痕跡のある調査済みの土坑が検出された。さらに東壁際中央で、柱穴状の遺構が検出された。この柱穴は未調査であった。また、北東隅で礫が１点出土している。

ⅢＬ１ｄ５（第９図）

表土層を掘り下げると、調査区の南側に東西に走る溝の痕跡が確認された。さらにローム面まで掘り下げを行ったが、この溝以外に遺構を検出することはできなかった。

ⅢＬ２ｄ４（第９図、図版４－７）

表土層を掘り下げると、全体に埋め戻しを行った様子で、東西に確認された掘り込みも柔らかい黒褐色土



第８図　検出された遺構と土層堆積状態(7)（1/60）

とローム層が互層となっている。西側の土坑（図版４－８）は底面が２段となっているが、土坑の形態によるものか、２基（206･207号土坑）の重複かは明らかでない。東側の掘り込みは、方形の掘り込み（209号土坑）の中に浅い円形の掘り込み（208号土坑）が見られるが、円形の掘り込みのところにあった何かを掘り上げるために周辺を拡張して掘り下げたように見受けられる。独立土器のあった箇所かとも思い、報告書を再読したが、未だ不明である。

ⅢＬ３ｄ３（第９図、図版５－１）

表土層を掘り下げると、調査区の中央よりやや南側に東西に走る溝状の掘り込みが検出された。これは宮坂氏の調査したトレンチ痕と考えられたが、さらに掘り下げるといくつかの土坑（210～213号土坑）が検出された。これらは覆土が柔らかで、すべて一度掘られてあるものと考えられるが、同一個体になると考えられる縄文時代中期後半の土器片（第21図６、図版15－３）が残されていた。遺構の性格は明らかにできない。

ⅢＬ１ｅ３（第14図、図版５－２）

表土層を掘り下げてみると、それ以下の土層も調査後に埋め戻しされている様子が見受けられたが、その層中からいくつかの礫が出土し始めた。同時に掘り下げを行っていたⅢＭ１ａ５でも同様に礫が確認されているため、宮坂氏の調査した環状列石の一部にあたると考えられた。そこで、南側のⅢＬ１ｅ４、ⅢＭ１ａ３、ⅢＭ１ａ４を拡張して掘り下げ、列石の全体像を明らかにすることとした。

ⅢＬ２ｅ２（第14図）

表土層を取り除くと、それ以下の土層も調査後に埋め戻されている様子が見受けられたが、その層中、東壁際で礫が１点検出された。また北東隅で土坑も検出された。礫は、上記ⅢＬ１ｅ３や後述するⅢＭ１ａ５で検出した環状列石に続くものであると考えられたため、東側のⅢＭ２ａ２を拡張することとした。北東隅の土坑内から礫が数点出土しているが、宮坂氏の調査した当時の写真を見ても礫は見られないことから、調査後の埋め戻しに際し、周辺の礫を一緒に埋めたものと考えられる。

この他、西壁際で掘り込みを１基検出したが（256号土坑）、これは未調査のものであった。

ⅢＬ３ｅ１（第９図、図版５－３）

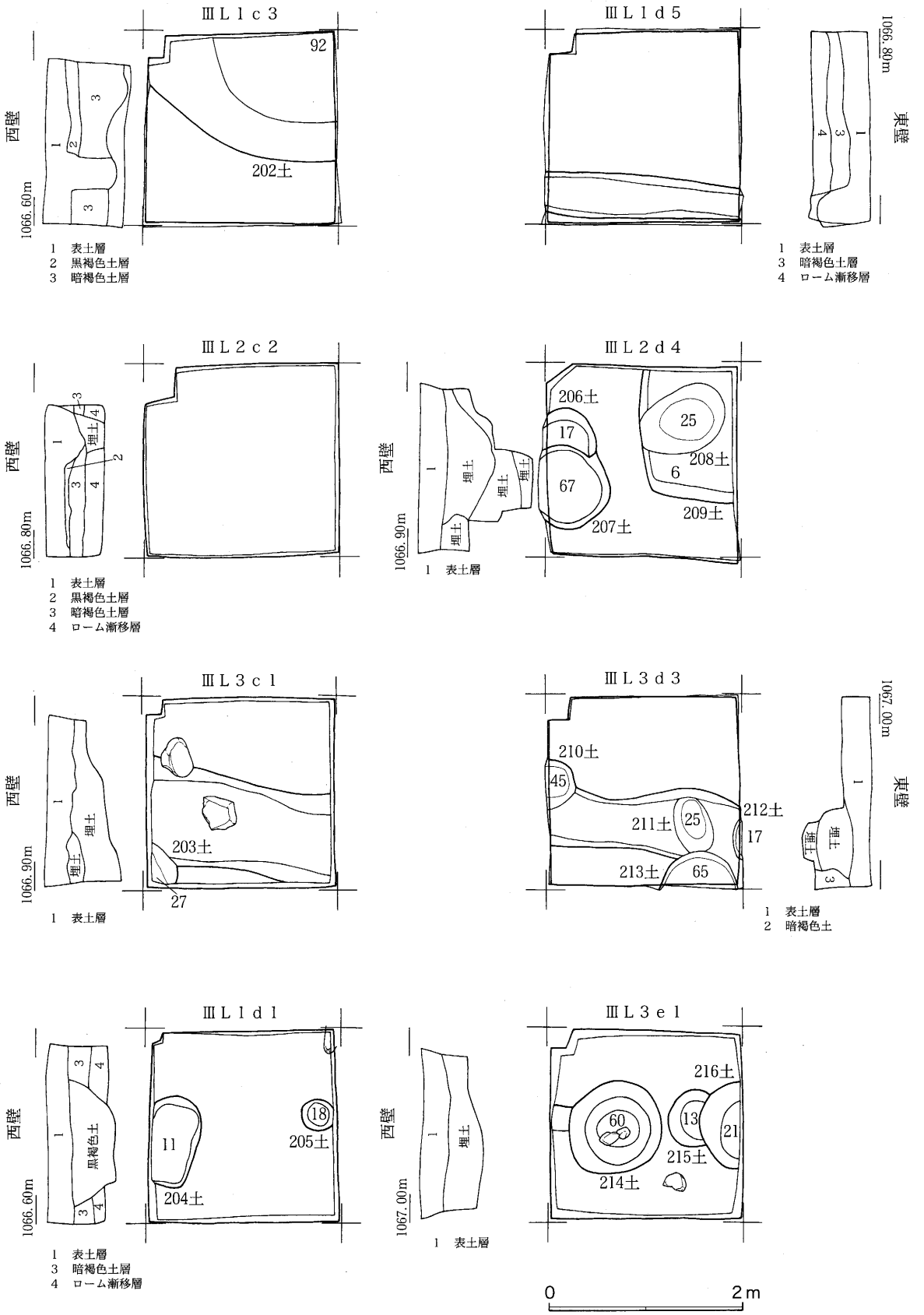
表土層を掘り下げると、それ以下の土層も調査後に埋め戻されている様子が見受けられ、ローム面も地表面の傾斜に比して西側に傾斜がきつくなっていた。西側で検出された土坑（214号土坑）は、平面径が１ｍ弱であるが、断面形はＹ字状となっている。東側で検出された２基の土坑（215・216号土坑）は重複しているが、どちらの覆土も明るい褐色でよく締まっており、未調査のものであった。

ⅢＭ１ａ１（第10図、図版５－４）

表土層を取り除くと、南壁際に東西に走るトレンチの痕跡が現れる。そのトレンチに掛かるように、長径130㎝、短径80㎝、深さ58㎝の長円形の土坑（217号土坑）が検出された（図版５－５）。覆土は中程にロームブロックが堆積し、その上下にロームブロックが混じる暗褐色土が堆積している。ロームブロックの混入が多く、ボソボソしているが、未掘の遺構であると考えられる。遺物は、縄文土器片や石片が10点出土している。この土坑は墓坑になるのではないかと考えられる。他に東壁際に柱穴状の遺構が３基(218～220号土坑)重複して検出されている。

ⅢＭ１ａ５（第14図、図版５－６）

表土層を取り除くと、埋め戻した土層で、中央を南北に礫が連なって検出された。宮坂氏の調査した環状列石の一部と推察された。そこで、全体を明らかにするため、周辺の調査区を拡張して掘り下げることとした。環状列石については、後述する。



第９図　検出された遺構と土層堆積状態⑻（1/60）

ⅢＭ２ａ４（第10図、図版５－７）

表土層を取り除くと、北東隅でローム漸移層が検出されたが、西半から南東隅にかけては埋め戻された痕跡が認められた。その掘り込みはそれほど深くなく、ローム面となったが、南側中央で明らかに埋め戻したことが分かる径65cm、深さ40cmの遺構（225号土坑）が検出された。東壁際北側の遺構（224号土坑）、西壁際北側（221号土坑）と南側の遺構（222･223号土坑）は未掘のもので、覆土にロームブロックを含む。底面が二段になっていることから、重複しているものと考えられる。

ⅢＭ３ａ３（第10図、図版５－８）

表土層を取り除くと、北西側で掘り込み（226・227号土坑）を検出した。平面形がだるま状となっていたが、掘り進むと２基の遺構が重複していた。覆土による違いはほとんど無く、底面の段差もほとんど無いため、新旧関係等は不明である。

ⅢＭ１ｂ３（第10図、図版６－１）

表土層を取り除いた後、ローム漸移層まで掘り下げると、調査区の南西で遺構（228号土坑）を検出した（図版６－２）人為的に埋め戻された様子を示す。西側に続いているが、全掘しておらず、全体の形状は不明であるが、隅丸の長方形を呈すると考えられる。覆土は①・③層が２cmから５cmのロームブロックを多く含み、硬くよく締まっている。微細な炭化物粒子も含んでいる。②層は５cmから10cm台のロームブロックを含んでいる。覆土の堆積状況から、縄文時代の墓坑と考えられるものである。土坑の確認面に至るまでの間で、縄文土器片の出土があったが、土坑内からは遺物は出土していない。

ⅢＭ２ｂ２（第10図、図版６－３）

表土層を取り除くと、南側に明らかに埋め戻したと考えられる溝状遺構が検出された。宮坂氏の調査したトレンチと考えられるが、そのトレンチに掛かり、南西隅に土坑（229号土坑）が検出された。この土坑も埋め戻されており、調査済みのものである。

ⅢＭ３ｂ１（第10図、図版６－４）

表土層を取り除くと、調査区の西半分が大きく掘り込まれている形跡が認められた。掘り進めていくと、確認面から深さ110cmもある大きな穴（230号土坑）となったが、壁面は大きく傾斜しており、壁面にも別の柱穴状の遺構（231～234号土坑）が掛かるように検出された。覆土は黒褐色土とロームが互層となっており、明らかに埋め戻されたもので、大きな掘り込みと柱穴状の遺構との関係は明らかでない。他に調査区の北東で、径60cmから70cm、深さ18cmの遺構（235号土坑）が検出されたが、こちらは未掘のものであった。

ⅢＭ１ｃ５（第10図）

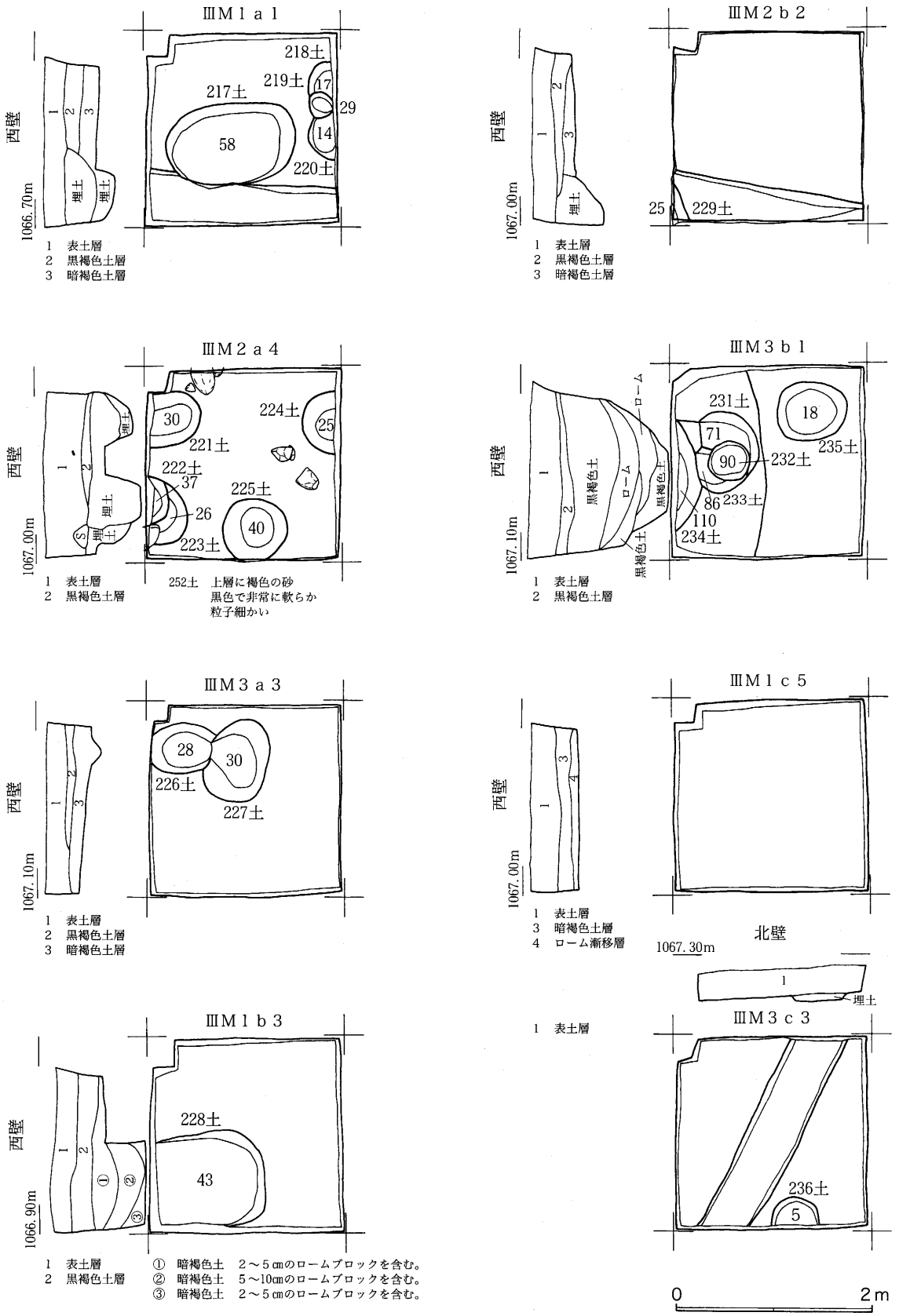
表土層を取り除いた後、ローム漸移層まで掘り下げたが、遺構の検出はなかった。遺物は縄文土器片や石片が10点出土している。

ⅢＭ２ｃ４（第15・16図、図版６－５）

表土層を取り除いた後、黒褐色土、暗褐色土と掘り下げると、北壁際（６号土坑）と東壁際（９号土坑）に遺構が検出された。さらに、拡張により北東隅にも遺構（７号土坑）が検出されたが、これらについては後述する。

ⅢＭ３ｃ３（第10図）

表土層を取り除くと、南西隅から北東隅に走る溝状遺構が検出された。深さは10cm足らずと浅い。トレンチや耕作による畝の方向とは異なっているため、性格は不明である。他に、南壁際で土坑（236号土坑）が１基検出されている。これも深さは５cmほどである。



第10図　検出された遺構と土層堆積状態⑨（1/60）

ⅢＭ１ｄ３（第11図、図版６－７）

表土層を取り除くと、暗褐色土を覆土に持つ土坑状の遺構が連なっているように見られたため、掘り下げていったが、この土層がローム層の下にまで入り込んでいる。そこでこのローム層を取り除いていると、調査区全体に掛かる大きなくぼみ（237号土坑）となった（図版６－６）。この落ち込みは、倒木痕と考えられる。これに掛かるように東側で深さ19cmと11cmの柱穴状の掘り込み（238・239号土坑）が見られるが、人為的なものか倒木痕に伴うものか明らかでない。

ⅢＭ２ｄ２（第15・16図、図版６－８）

表土層を取り除くと、南壁際中央で、埋め戻された土層を持つ土坑が検出された。最低でも３基の土坑（２～４号土坑）が重複しているが、一度掘られているため、新旧関係は不明である。さらに精査することにより、西側中央で深さ36cmの土坑（１号土坑）が検出された。

ⅢＭ３ｄ１（第15・16図、図版７－１・２）

表土層を取り除き、黒褐色土、暗褐色土と掘り進むと、多くの遺構（27～30、32～34号土坑）が検出された。検出状態では、遺構の中央が周辺より黒色味が強く、柱痕になると考えられるものも確認された。

ⅢＭ１ｅ５（第11図、図版７－３）

表土層を取り除き、黒褐色土から続く暗褐色土を取り除くと、調査区の南東隅と南壁際中央に、暗褐色土を覆土に持つ遺構が検出された。南壁際の遺構（241号土坑）は覆土中に礫が入っているが、特に柱痕等は観察できず、詰められた様子はない。深さは58cmで、底面にも礫があるが、これはローム層中にあるもので、運び込まれたものではない。南東隅の遺構（240号土坑）は深さが19cmで、上層から礫が２点出土している。

ⅢＭ２ｅ４（第15・16図、図版７－４・５）

表土層を取り除いた後、黒褐色土、暗褐色土と掘り進むと、北壁際、西壁際、南東隅でそれぞれ遺構（10、15～17、20号土坑）が検出された。どの遺構も未調査のものであり、周辺の遺構との関係を調査するため、隣接する調査区を拡張した。

ⅢＭ３ｅ３（第15・16図、図版７－６）

表土層を取り除くと、北壁際から北西隅にかけて大きな掘り込みが確認された。覆土はロームブロックの混じる埋め戻された土層である。掘り込みの中には土坑（55号土坑）が１基あるが、これは調査されたものである。拡張に伴い、精査したところ、この掘り込みの外側にも遺構（56号土坑）が検出された。

ⅢＮ２ａ２（第15・16図、図版７－７）

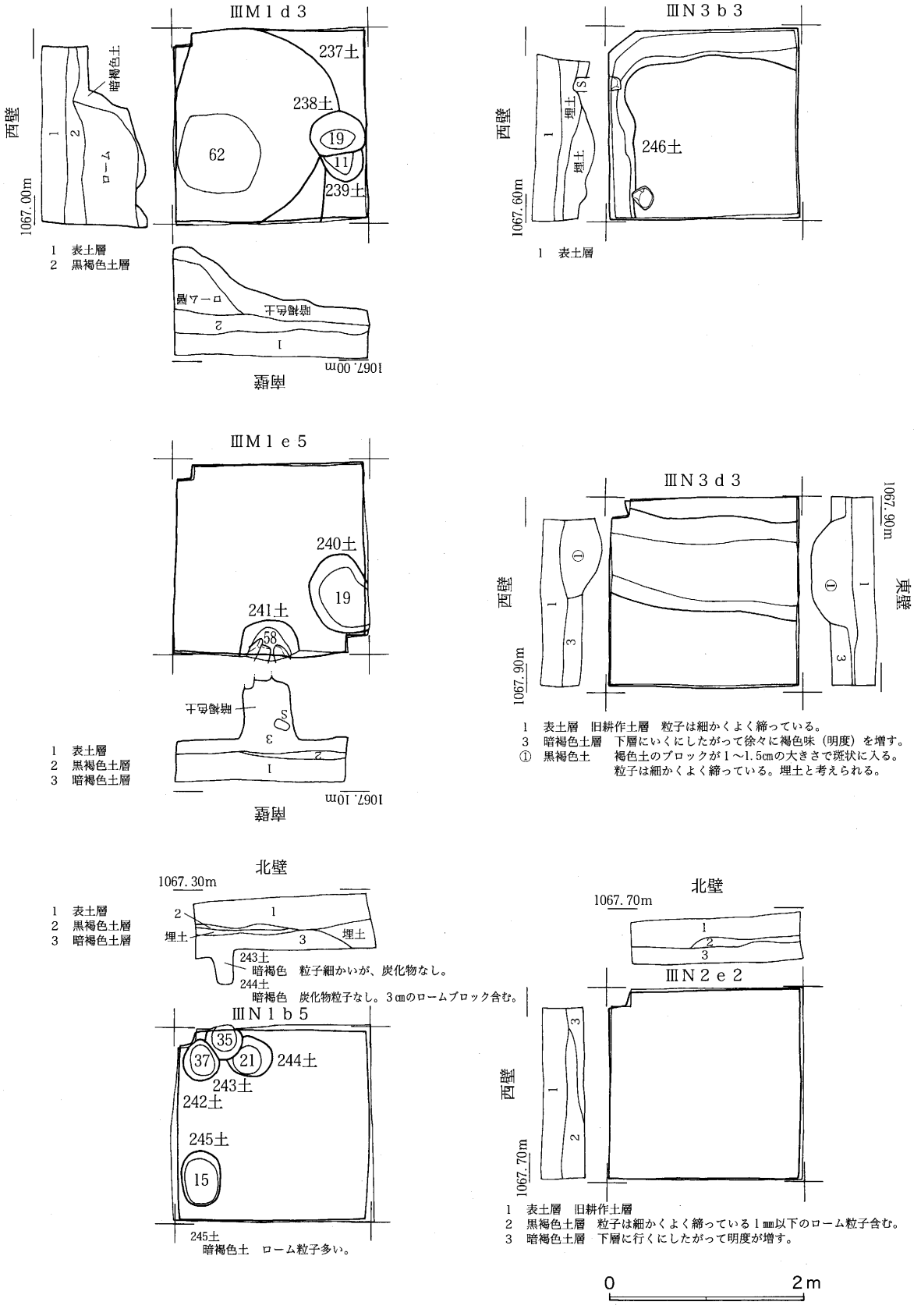
表土層を取り除くと、北壁際に東西に走るトレンチの痕跡が検出された。調査区の東側中央では、径80cmから90cm、深さが43cmの土坑（22号土坑）が検出された（図版７－８）。覆土は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締まっている。１cm以下の炭化物粒子を含むほか、稀にロームブロックを含む。底面近くで、礫が２点出土している。

ⅢＮ３ａ１（第15・16図）

表土層を取り除き、黒褐色土、暗褐色土と掘り下げていくと、20点余りの縄文土器片や石片が出土したほか、調査区の南側中央で焼土も検出された。周辺を拡張した際に精査すると、その焼土の下で柱穴（43号土坑）が検出されたほか、いくつかの遺構（44・54号土坑）が検出された。これらについては、後述する。

ⅢＮ１ｂ５（第11図、図版８－１）

表土層を取り除き、暗褐色土を掘り進めていくと、縄文土器片や石片が出土し始める。ローム漸移層まで掘り下げると、北西隅と南西隅で、暗褐色の覆土を持つ掘り込みが検出された。遺構を掘り下げていくと、



第11図　検出された遺構と土層堆積状態(10)（1/60）

南西隅のもの（245号土坑）は深さ15cmほどの土坑となったが、北西隅（242～244号土坑）のものは、深さが21cmから37cmの柱穴状の遺構３基に分かれた。

ⅢＮ２ｂ４（第15・16図、図版８－２～５）

表土層を取り除くと、調査区の北東隅でローム漸移層が残っている他は、一段深く掘り込まれ、埋め戻されている様子がうかがえた。北西隅の土坑（70号土坑）、南西隅の土坑（71号土坑）は宮坂氏によって調査され、埋め戻されたものであったが、南東で検出した土坑（74号土坑）は未調査のものである。覆土は暗褐色土で、１cmから５cmのロームブロックを多く含む、よく締まった土層である。墓坑になると考えられる。

ⅢＮ３ｂ３（第11図、図版８－６）

表土層を取り除くと、北壁際でトレンチの痕跡と考えられる埋め戻された掘り込みが検出された。西壁際にも同じ土層を覆土に持つ埋めた痕跡のある遺構（246号土坑）を検出したが、ごく一部を掘ったにすぎず、その性格は明らかでない。

ⅢＮ２ｃ２（第15・16図、図版８－７）

表土層を取り除き、ローム漸移層まで掘り下げると、北側にトレンチと考えられる溝状遺構が検出されたほか、南西隅に土坑、南東隅に焼土が検出された。拡張により、焼土の下に土坑（90号土坑）が存在することも明らかになったが、これらについては後述する。

ⅢＮ３ｃ１（第15・16図、図版８－８）

表土層を取り除くと、北側に東西に走るトレンチの痕跡を確認できた。このトレンチを再度掘り下げていくと、調査区の西側に調査されたと考えられる掘り込み（82・83号土坑）が検出された。この遺構は、底面が二段となっており、重複したものであることが理解される。

ⅢＮ２ｄ４（第15・16図、図版９－１～４）

表土層を取り除くと、北側に幅50cmの細長い溝状遺構（図版９－１）が検出されるが、その溝に掛かるように、未掘の土坑（95・96号土坑）が検出された。溝は宮坂氏の調査したトレンチとは様子は異なるが、表土層直下から掘り込まれており、覆土も柔らかいため、それほど古いものではないと考えられる。検出した土坑の東半分を掘り下げると（図版９－２）、底面に段差があり、２基の土坑の重複であることが確認された。北側の土坑の方がやや深いが、新旧関係を明らかにできるような土層の線を引くことはできなかった。南壁際で検出した遺構（100号土坑）は、土層の観察から柱痕を持つ柱穴となった。

ⅢＮ３ｄ３（第11図）

表土層を取り除くと、北側に東西に走るトレンチの痕跡が確認された。このトレンチ以外に、遺構の検出はなかった。

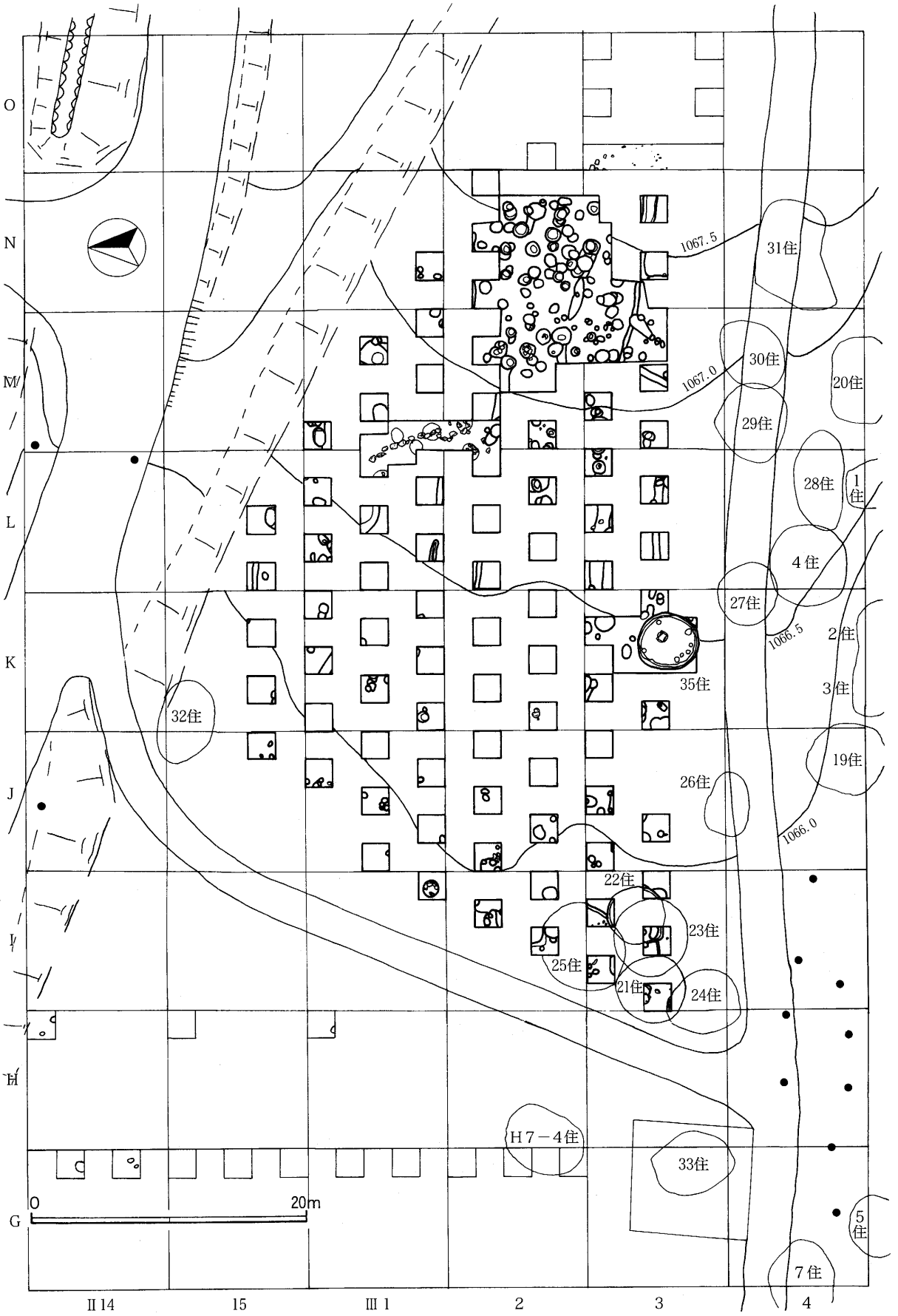
ⅢＮ２ｅ２（第11図）

表土層を取り除くと、黒褐色土、暗褐色土と続く。ローム漸移層まで掘り下げたが、遺構の検出はなく、遺物の出土もなかった。

第２節　検出された遺構

住居址

今年度の調査で検出した住居址は、新たに発見した住居址が１軒と、宮坂氏が調査した21号住居址から25号住居址までのうち、調査区に掛かった部分である。宮坂氏の調査後、試掘調査によりいくつもの住居址を確認しているが、その大部分は遺構検出面で調査を終了していたり、一部分を掘り下げたにすぎない。今回



第12図　発掘区と遺構の分布（1/400）

住居址を完掘したが、平成２年度の調査で未発掘の住居址を34号住居址として命名しているので、今回の住居址を正式に35号住居址と命名する。

35号住居址（第13図、図版９－５～10－１）

ⅢＫ３ｃ３で住居址の北西端が、ⅢＫ３ｅ３で住居址の北東端が検出されたため、周辺を拡張し、検出・調査を行った。平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は主軸の箇所で径約430cmを測る。深さは確認面であるローム漸移層からは40cmほどであるが、地表面から土層観察ができたⅢＫ３ｃ３で、遺物の出土状態などを考え合わせると、最も深いところでは60cmはあったものと考えられる。壁際には、幅20cm、深さ10cmほどの周溝が全周している。柱穴は４本で、壁際によっている。柱穴の径は30cmから50cm、深さも68cmから86cmとばらつきがあるが、どれもしっかりしている。中央のやや奥まったところに石囲炉があるが、最も奥側の炉石は立てられており、床面よりも40cmほど立ち上がっている珍しいものである。また、住居址のほぼ中央にも床面の焼けている箇所がある。入口があったと考えられる南西側の床面には、深さ15cmの掘り込みが見られるが、出入りに用いる階段を埋めた施設の痕跡であろうか。この掘り込みの両側に埋甕がある。東側の埋甕２は正位に埋められているが、口縁部及び底部が欠損している。西側の埋甕１は、口縁部から底部まであるが、破損した状態で埋まっていた。復元はできたが、欠損部分も多い。また、入り口付近には径45cmほどの礫が３個流れ込むような形で入り込んでいた。なお、主軸方向は、Ｎ－31°－Ｅを指す。住居址の外側にもいくつかの遺構が検出されているが、本住居址との関係は明らかでない。

遺物は、覆土中より多くの縄文土器片や石片が出土しているが、復元できたものは前述した埋甕２点と覆土中から出土した１点だけである（第21図１～３、図版14－７・８）。本住居址の時期は、これらの土器から縄文時代中期後半の曽利Ⅳ式期になると考えられる。

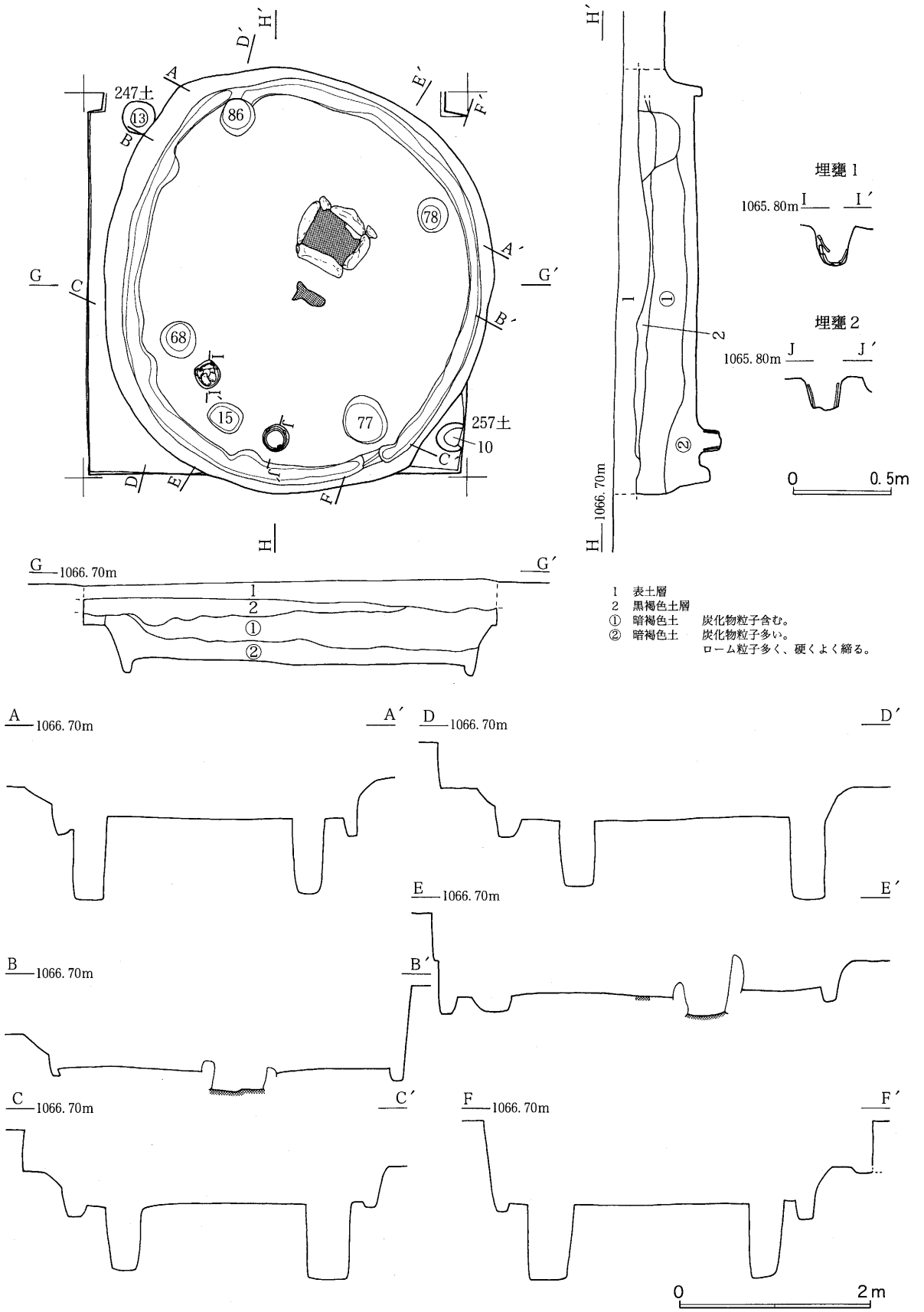
21～25号住居址

昭和17年に宮坂氏により調査されたものであるが、今回は調査区を部分的に掘り下げ、その位置を確定することができた。なお、宮坂氏の報告書の本文の記載内容と全体図（尖石遺跡竪穴住居址分布図）で内容や位置関係を照合すると、住居址番号に整合性が取られていない。昭和61年刊行の『茅野市史　上巻』ではこの５軒の住居址の位置関係が訂正され記載されているので、これに沿って改めて番号を訂正する。全体図中、第21址を24号住居址、第22址を21号住居址、第23址を25号住居址、第24址を23号住居址、第25址を22号住居址とする。

この21号住居址から25号住居址までに関連すると考えられる調査区は、ⅢＩ３ａ３、ⅢＩ３ｂ１、ⅢＩ２ｃ４、ⅢＩ３ｃ３、ⅢＩ３ｄ１、ⅢＩ３ｅ３の６調査区である。

ⅢＩ３ａ３（第２図、図版２－４・５）では、表土層の下約60cmの深さで黒褐色の埋め戻しを行った土層が堆積しており、平坦で硬くよく締まった住居址の床面が現れ、北壁際に礫を抜かれていると考えられる炉址が検出された。また、南壁際には別の住居址の周溝と考えられる掘り込みが検出されている。周辺の調査区との関連から、これらの住居址は、昭和17年に宮坂英弐氏の調査したもので、炉址と床面が21号住居址の一部、南壁際の周溝が宮坂氏が南作場道に掛かるため調査を行わなかった未発掘住居址の24号住居址の北端であることが明らかとなった。21号住の床面には平坦な礫が置かれているが、これは報告書に記載されているものがそのまま残されたものである。この他、住居址内からは、わずかに縄文土器片などの遺物が出土しているが、これらは埋め戻しの際に紛れ込んだもので、原位置を表しているものではない。

ⅢＩ３ｂ１（第２図、図版２－６）では、表土層の下に埋め戻しを行ったと見られる黒褐色土が40cm余り堆積し、平坦で硬くよく締まった住居址の床面が現れる。この床面を伴う住居址は、昭和17年に宮坂氏の調



第13図　35号住居址（1/60）・埋甕（1/30）

査した25号住居址の床面になると考えられる。北側に３基の柱穴状の掘り込み、南側に１基の長円形の掘り込みが検出された。また、床面に長さ50cmほどの礫が出土している。報告書の挿図にある礫と同一であると判断されるにも関らず、向きが変わっており、原位置を止めていないと考えられる。

ⅢＩ２ｃ４（第２図、図版２－７）では、調査区の北東1/4だけにローム漸移層が残っており、残り3/4は埋め戻した黒褐色土で、ロームブロックやローム粒子を含むが量は少ない土層であった。その埋土は50cmほどであるが、その面まで掘り下げると、いくつかの遺構が検出された。南東隅の土坑とその北側にある壁面は、報告書にある25号住居址の北壁とその内側の土坑であると考えられるが、深さは報告書によると70cmとあるが、138cmある。土坑の上面は埋め戻した土で掘り下げ中に崩落してしまうほど脆弱であったが、下半は土層が締まっていた。掘り下げ途中でやめてしまったものであろうか。この土坑の西に接して、径45cm、深さ67cmの柱穴状の掘り込みがあった。また、調査区の北西には径30cm、深さ16cmの柱穴状の遺構もあるが、報告書にも記載が無く、新しく検出した遺構である。25号住居址の壁は調査区の中央付近で北上するが、これについては、新たな遺構になるのではないかと思われる。しかし、周辺の調査区の掘り下げでは、確認できなかった。

ⅢＩ３ｃ３（第３図、図版３－１）では、表土層を取り除くと、調査後埋め戻されたと分かる土層が約50cmにわたり堆積しており、その下は平坦でよく締まった住居址の床面であった。調査区の東側にはやや窪んだ炉址があり、周辺には礫を抜き取ったと考えられる小さな穴が回っていた。焼土はこの炉址内からさらに南側へと続いている。この炉址を切って、周溝が調査区の東壁中央から北壁中央へ抜けている。炉は宮坂氏が昭和17年に調査した23号住居址に、周溝はⅢＩ３ｄ１やⅢＩ３ｅ３でも確認された22号住居址の南西隅にあたるものであろう。調査区の中央から西壁中央にかけても周溝の一部と考えられる溝が走っているが、宮坂氏の調査した21号住居址から25号住居址までの遺構配置の中ではどれも位置的にはずれており、この溝の北ないし南に新たな住居址が存在した可能性も残されている。

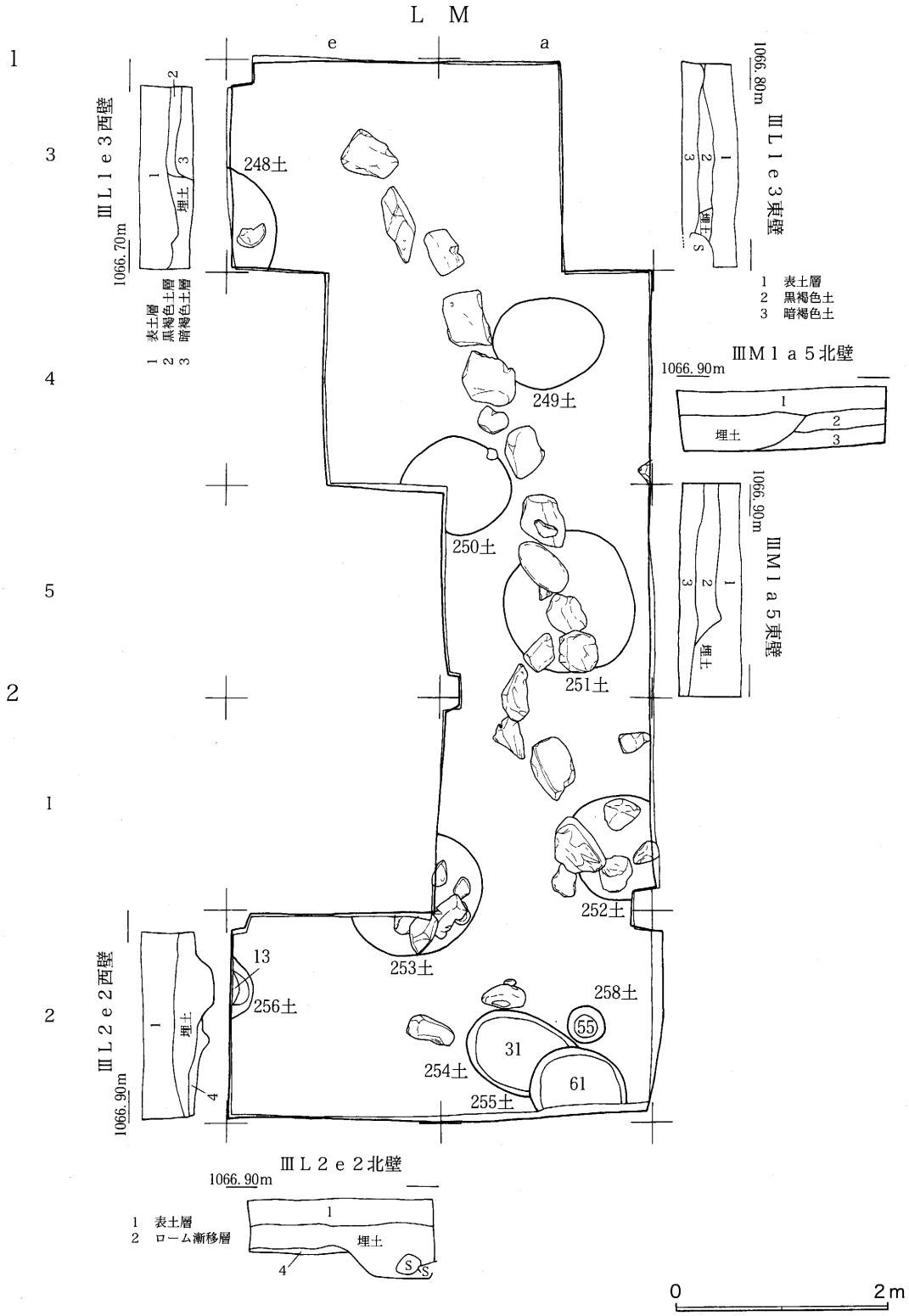
ⅢＩ３ｄ１（第３図、図版３－２）では、表土層を取り除くと、南壁際に沿って住居址と考えられる掘り込みが検出された。覆土は調査後埋め戻されたもので、遺物等の出土はないが、壁際では周溝も検出されている。この住居址と切り合うように、中央を南北に走る浅い掘り込みがある。はっきりとした掘り込みではないが、この溝の東西にはあまりレベルの差はないが、西側の方が若干低い。また、周溝の東側には、ローム漸移層が残っており、西側にはないことから、西側に遺構が広がっており、この溝が住居址の周溝であることが理解される。

これらの住居址は、昭和17年に宮坂氏の調査したもので、南側の住居址が22号住居址、西側の住居址が25号住居址になるものと考えられる。

ⅢＩ３ｅ３（第３図、図版３－５）では、表土層を取り除くと、北西隅に掘り込みが検出された。覆土は調査後に埋め戻しが行われたものであり、遺物の出土はなかったが、壁際には周溝も検出されている。周辺の調査区で検出された遺構との関連で、この住居址は昭和17年に宮坂氏の調査した22号住居址の南東隅にあたると考えられる。住居址と重複し、その南側に浅い落ち込みがあるが、壁面や底面は凹凸が激しく、人為的なものとは考えられない。

列　石（第14図、図版10－２・３）

ⅢＬ１ｅ３、ⅢＬ２ｅ２、ⅢＭ１ａ５の各調査区で礫の出土を見たことから、これらが連なり、宮坂氏の報告した環状列石になることが予想された。尖石遺跡史跡整備委員会の席上でも、これらを全面的に明らかにして、写真撮影の後、測量を行うよう指導されたため、ⅢＭ１ａ４からⅢＭ２ａ２までの間を拡張した。


L M
e
a
1
3
4
5
2
1
2
248土
249土
250土
251土
252土
253土
254土
255土
256土
258土
13
31
61
55
Ⅲ L 1 e 3 西壁
1066.70m
埋土
1 表土層
2 黒褐色土層
3 暗褐色土層
Ⅲ L 1 e 3 東壁
1066.80m
埋土
1 表土層
2 黒褐色土
3 暗褐色土
Ⅲ M 1 a 5 北壁
1066.90m
埋土
Ⅲ M 1 a 5 東壁
1066.90m
埋土
Ⅲ L 2 e 2 西壁
1066.90m
埋土
Ⅲ L 2 e 2 北壁
1066.90m
埋土
1 表土層
2 ローム漸移層
0
2m

第14図　列石（1/60）

この環状列石について、宮坂氏の報告書中「昭和一七年度の発掘－発掘の日録－」には、８月20日の項に「(前略) 共に環状列石址中、その中央にある配石を除去して、その下を発掘し調査する。すると、配石の下には、一大竪穴のあることを確かめた。(後略)」とあり、さらに、９月２日の項に「(前略) 環状列石遺構中の配石一個を除き、その下に一大竪穴を発掘し (後略)」とある。

今回、拡張を行い、環状列石の全体像を明らかにしたが、列石の下にいくつかの遺構が確認できたものの、掘り下げを行った形跡は見られず、列石の配置も報告書の写真と大きく異なっているようには思われない。この周辺で調査を行った後に埋め戻されたと考えられる土坑は、ⅢＬ１ｅ３南西隅の礫の下と、ⅢＬ２ｅ１、ⅢＬ２ｅ２、ⅢＭ２ａ１、ⅢＭ２ａ２に掛かる２基である。特に後者については、宮坂氏の報告書の写真にも掘り下げてある様子が写されているほか、写真にはない礫が土坑内に多く埋められていたことから、これを指しているのではないかとも考えられる。報告書に使われている「挿図31　列石を除いた下の竪穴群」の写真は、「挿図30　竪穴群の発掘」の写真を別方向から撮影したものであり、後述する土坑群の項で述べる71～73、76～83号土坑のものである。

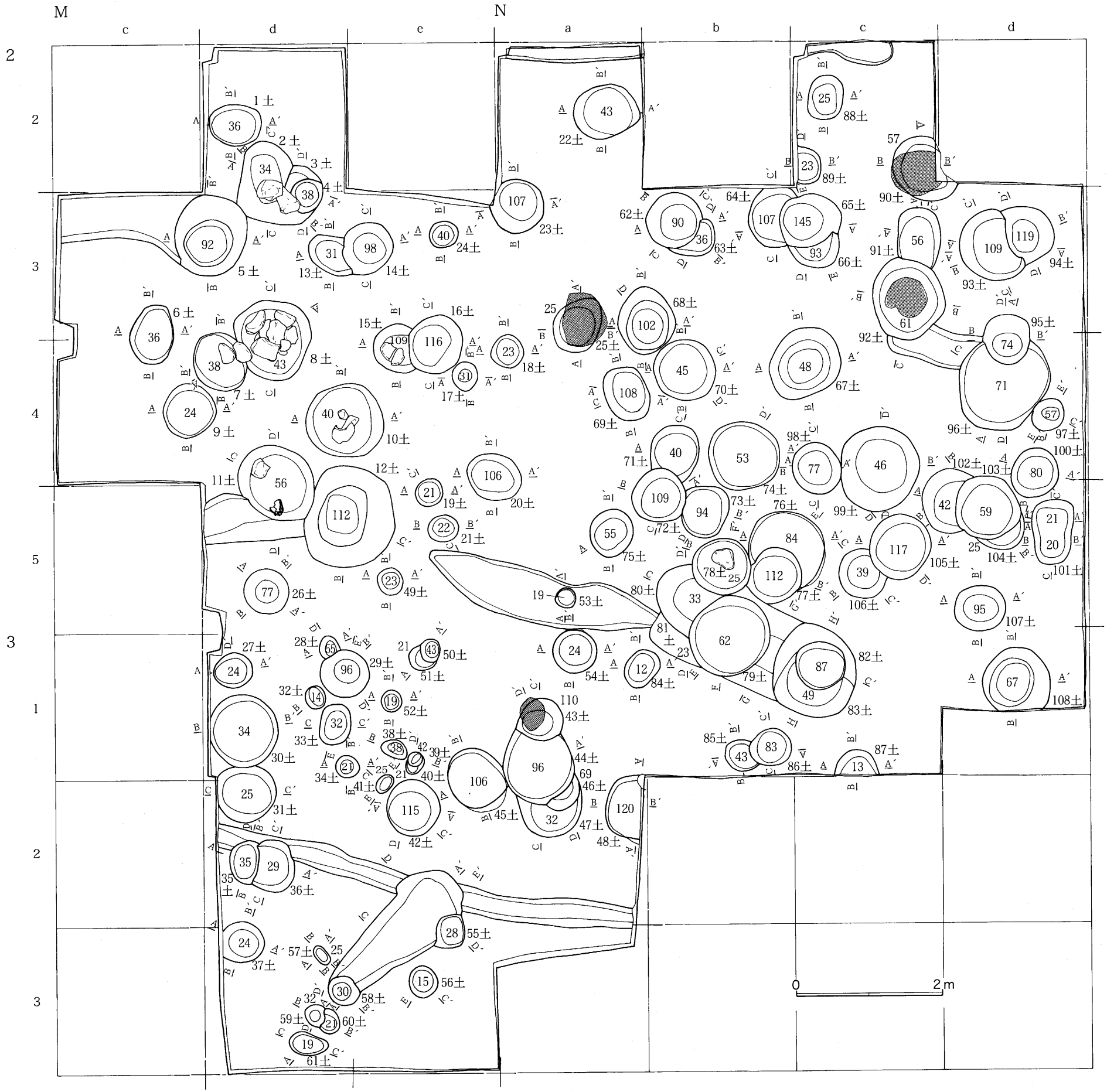
土坑群（第15～20図、図版10－４）

今回の調査範囲中、柱穴を含む土坑が特に集中している箇所が確認された。これらの遺構が単独で存在するものなのか、あるいはいくつかがセット関係にあり、方形柱穴列ないしは建物址を構成するものなのかを確認するため、土坑の集中している範囲を拡張し、面的な調査を行った。面的な調査を行ったのは、今回の調査範囲の東側で、ⅢＭ２・Ｍ３・Ｎ２・Ｎ３の内、134㎡である。

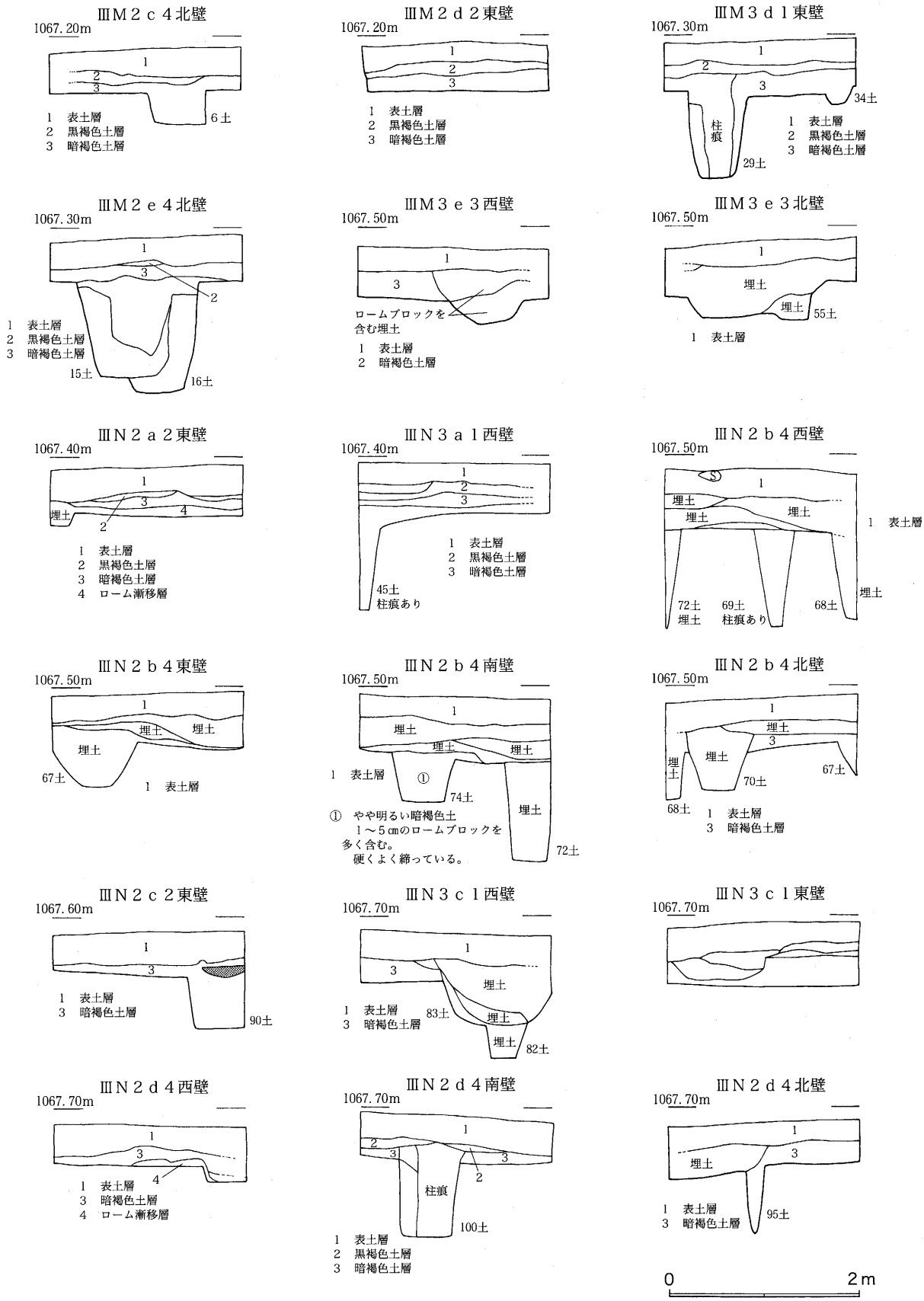
この拡張した範囲内からは、計108基の柱穴を含む土坑が検出された。この中から、覆土の状態や観察により、昭和17年に宮坂氏の調査した土坑も推測することができ、報告書の全体図との対比により、それらを確定することができた。宮坂氏の調査した土坑は、２～４号土坑（図版10－５）、５号土坑（図版10－６）、12号土坑（図版11－１）、68号土坑（図版12－６）、70号土坑（図版12－６）、71～73号土坑（図版12－８）、75号土坑、76号土坑、77号土坑、78号土坑、79号土坑、80号土坑、81号土坑、82・83号土坑（図版13－２）の19基である。

また、調査した土坑の内、覆土の観察により柱痕の検出されたものは、29号土坑（図版11－６）、42号土坑（図版12－１）、45号土坑（図版12－２）、48号土坑（図版12－３）、62号土坑、65号土坑（図版12－４）、69号土坑（図版12－６）、91号土坑（図版13－４）、93号土坑、98号土坑（図版13－８）、100号土坑（図版14－２）、105号土坑（図版14－４）、107号土坑（図版14－５）の13基である。残念ながら宮坂氏の調査した土坑の観察記録を見ることができなかったが、形状や規模が同じものもあり、この中にもいくつかはあったのではないかと思われる。他に、25号土坑、43号土坑（図版12－２）、90号土坑（図版13－３）、92号土坑（図版13－５）のように、遺構確認面で焼土の観察できたものもあった。

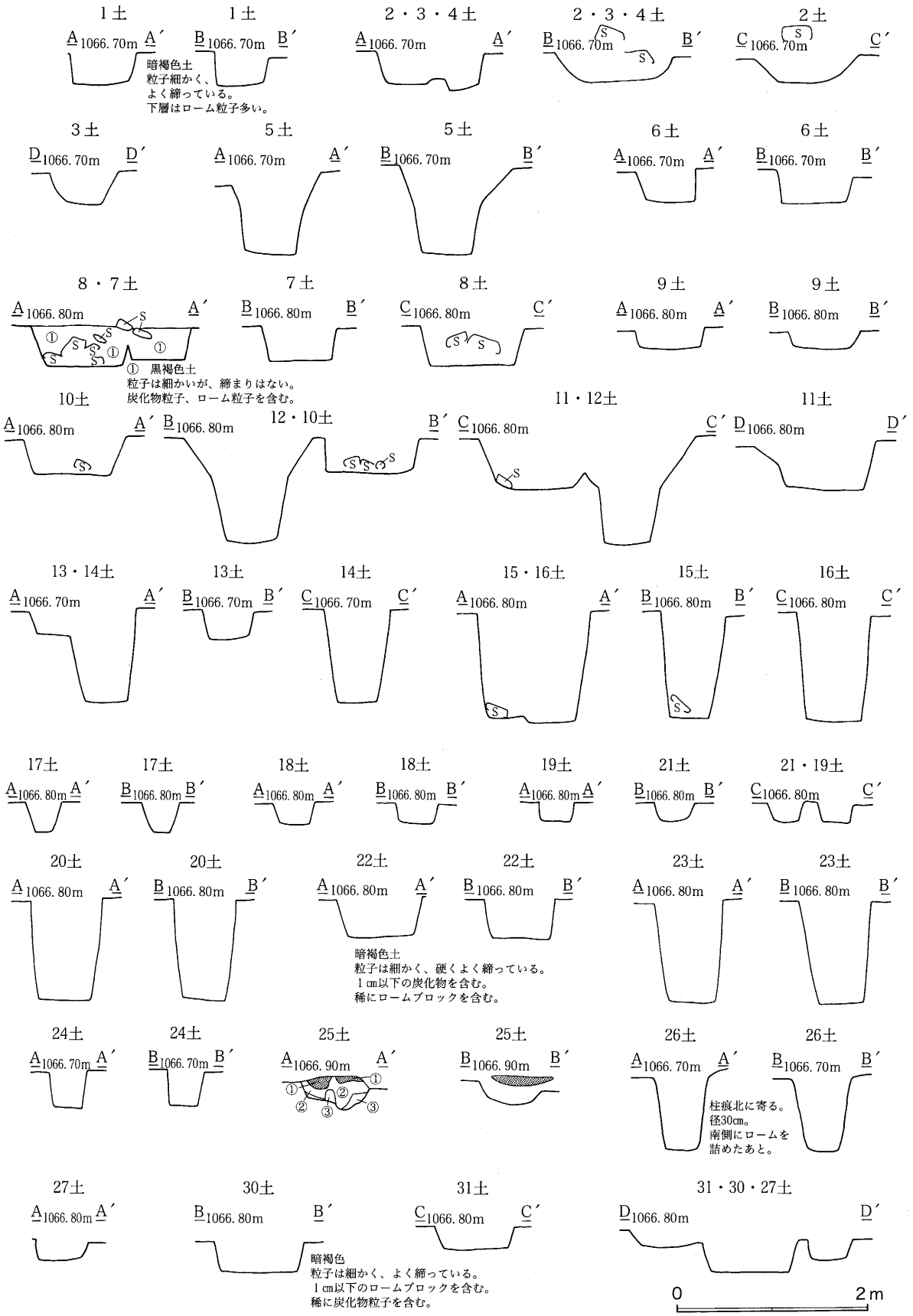
これらの土坑のセット関係を確認するために行った面的な調査であったが、余りにも遺構の数が多く、大きさや深さも様々であるので、今のところセット関係を明らかにすることができていないのは残念である。今後、本報告までに、宮坂氏の残された資料の調査等を行い、方形柱穴列や建物址の存在を明らかにしていきたい。



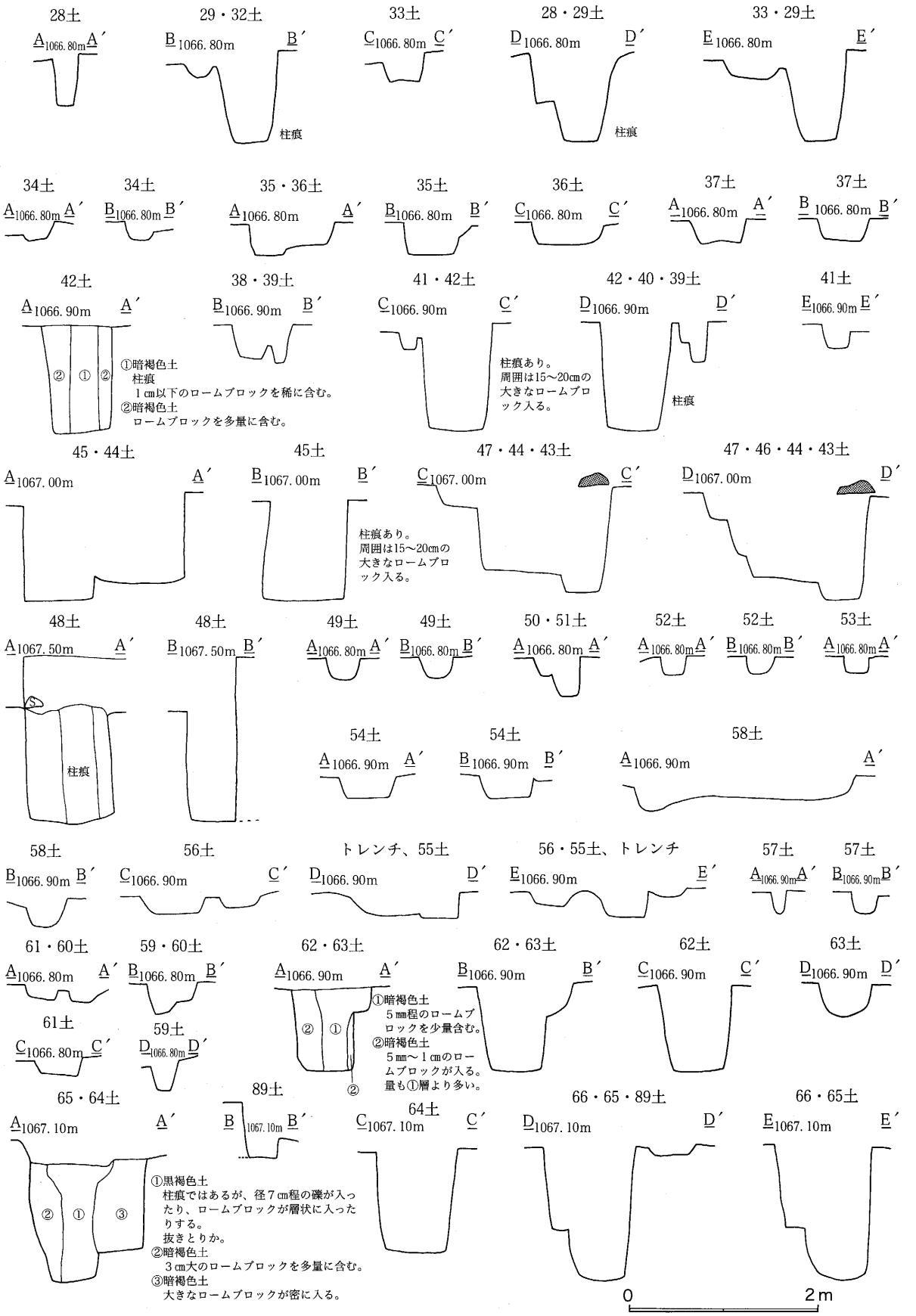
第15図　土坑群（1/60）



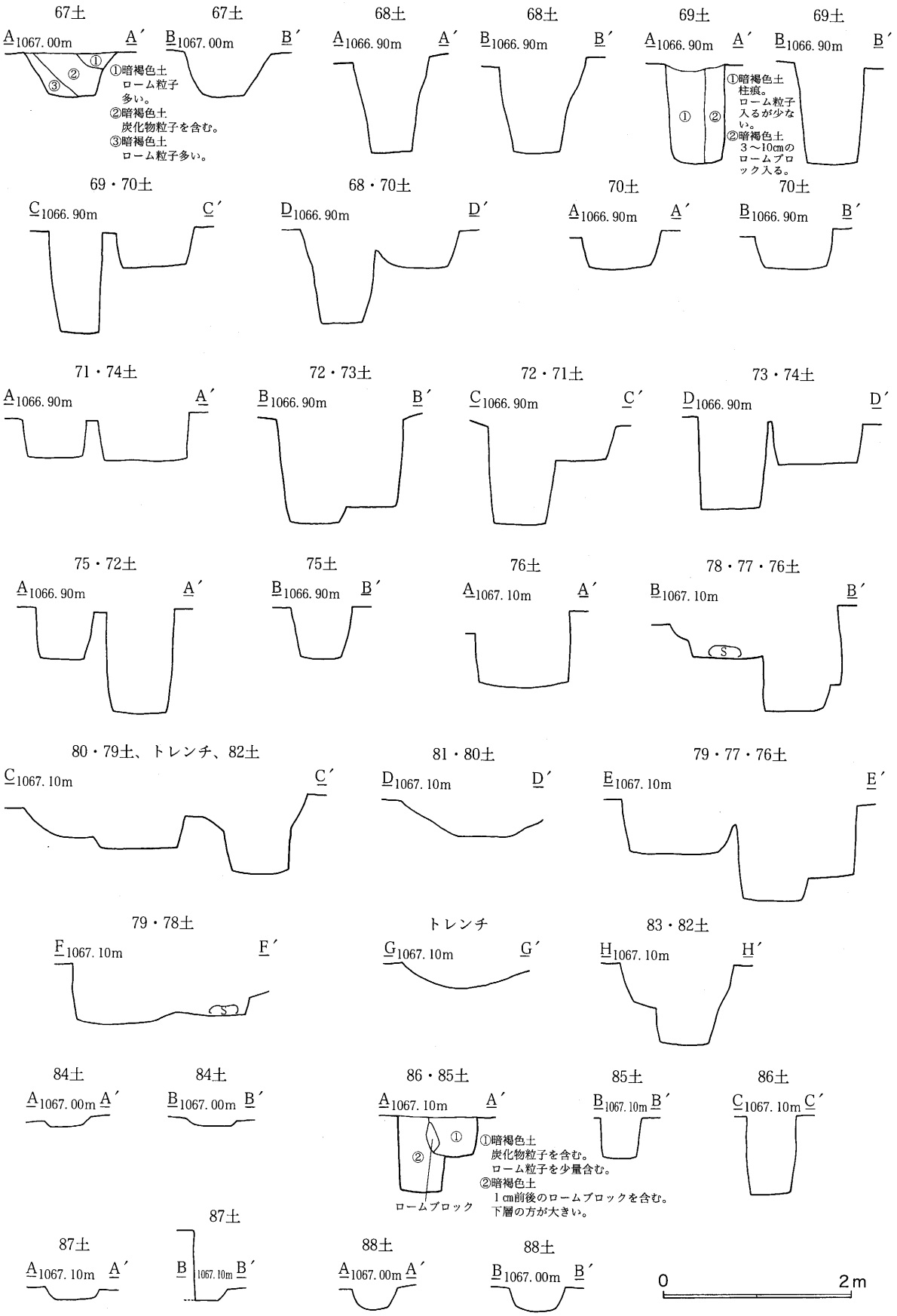
第16図　土坑群周辺の土層堆積状態（1/60）



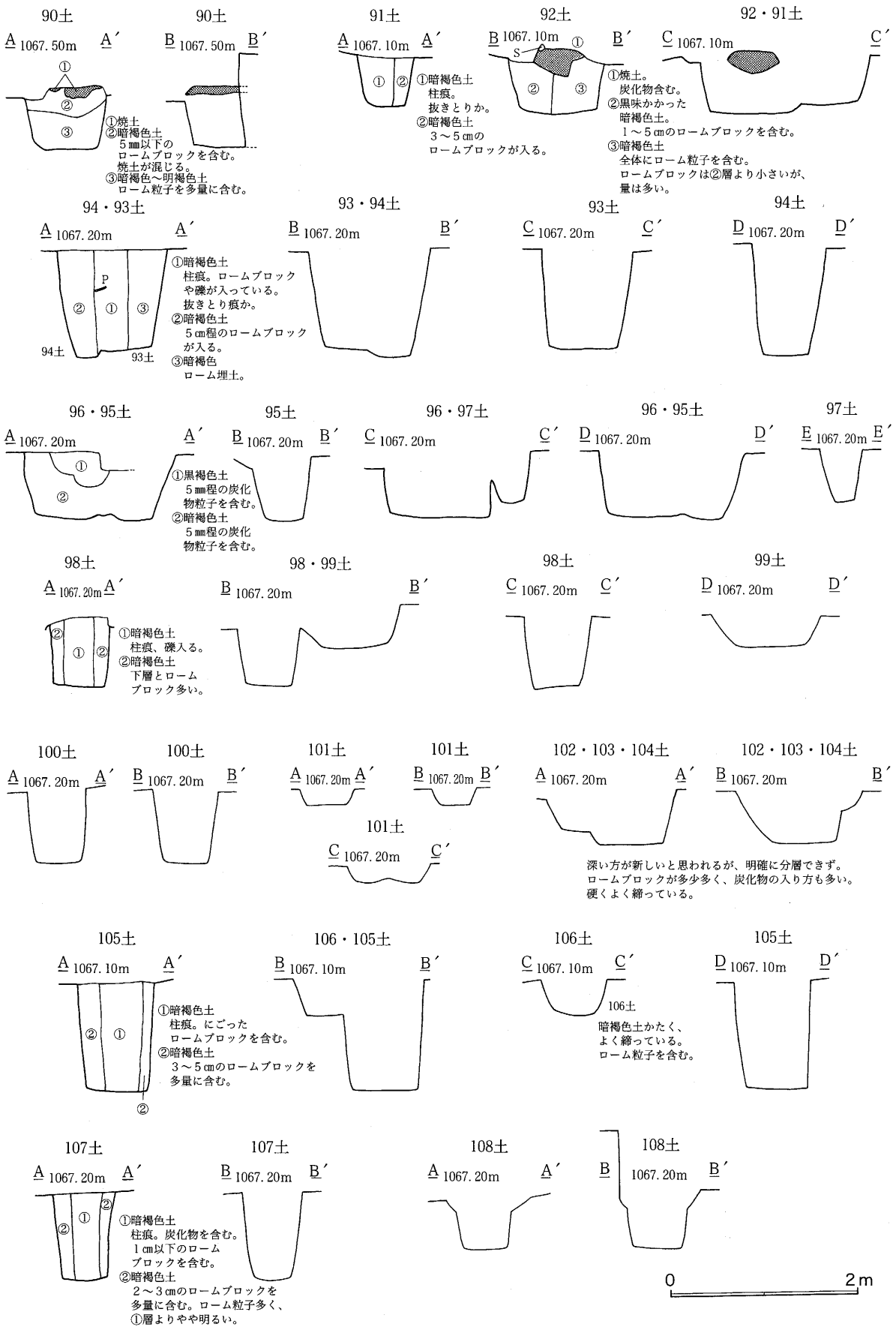
第17図　土坑群断面図(1)（1/60）



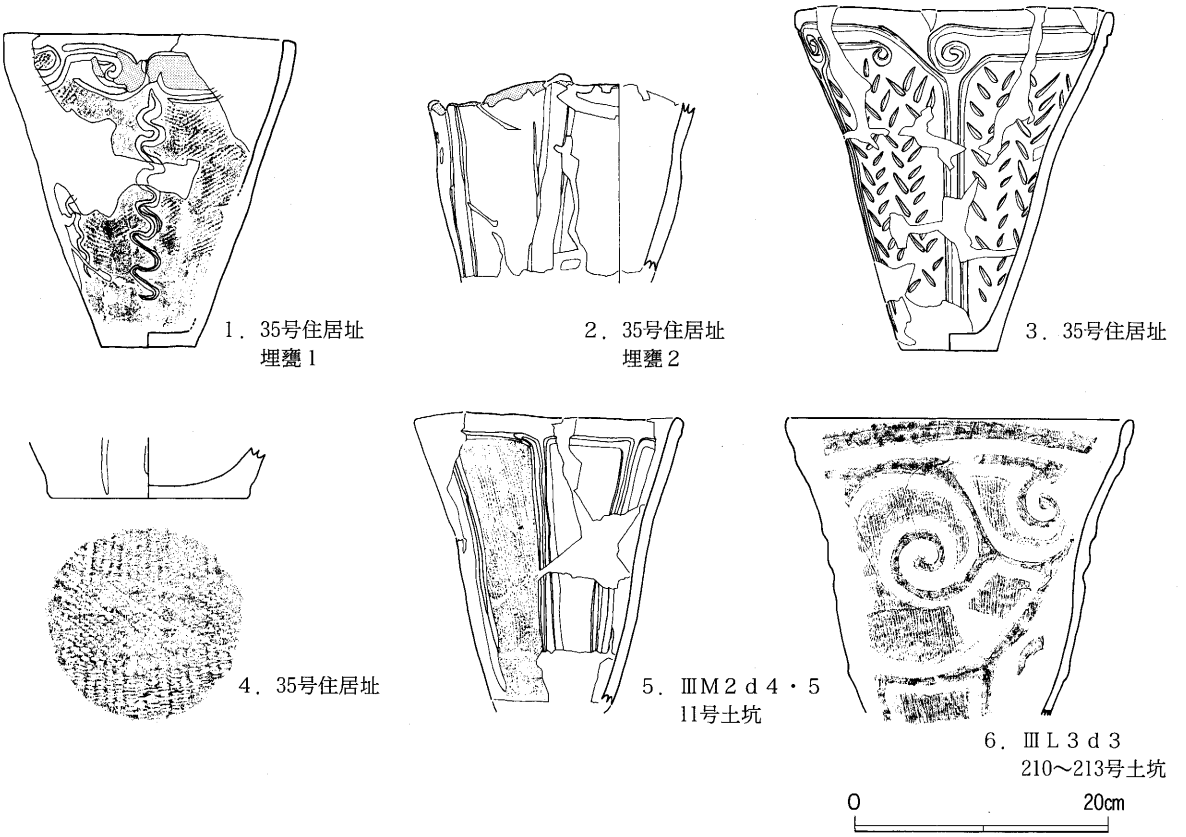
第18図　土坑群断面図(2)（1/60）



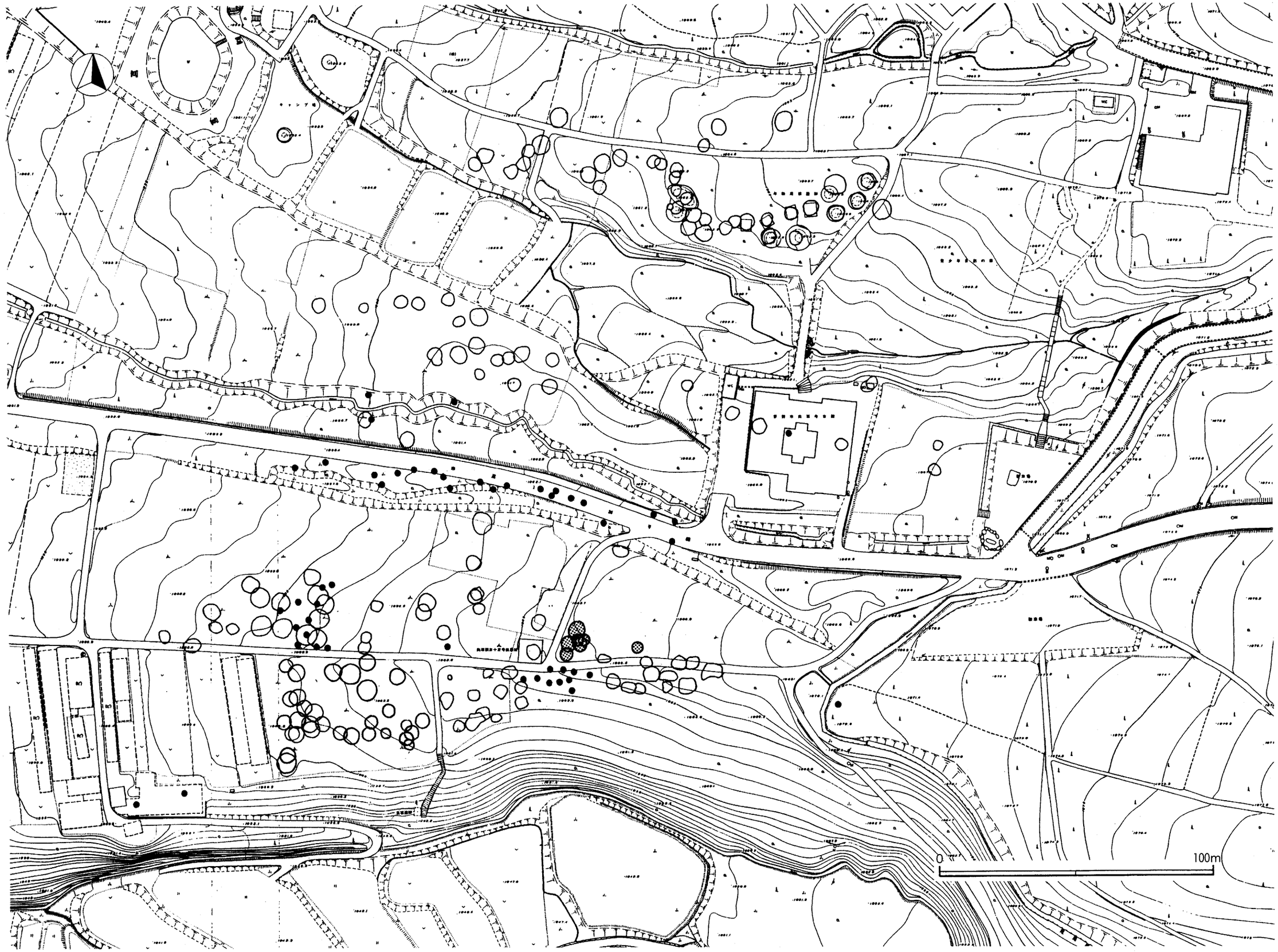
第19図　土坑群断面図(3)（1/60）



第20図　土坑群断面図(4)（1/60）


1．35号住居址
埋甕1
2．35号住居址
埋甕2
3．35号住居址
4．35号住居址
5．ⅢM2d4・5
11号土坑
6．ⅢL3d3
210～213号土坑
0
20cm

第21図　出土遺物（1/6）



第22図　遺構分布図（1/1500）

第4章　ま　と　め

茅野市教育委員会では、平成２年度から尖石遺跡整備のための事前の遺構確認調査を実施してきた。今回調査を行ったのは、尖石縄文考古館の道を挟んで南側に当たる箇所で、尖石遺跡の中では南東に位置する場所である。宮坂英弐氏はこの地点の南側を調査し、多くの住居址を調査している。また、平成13年と14年の試掘調査はこの南西側を調査し、多くの住居址を検出するなど成果を上げてきた。

宮坂氏は、昭和16年にこの地点にトレンチを開け、住居址が多数ある可能性を見出し、翌昭和17年にこの地点の調査を行ったが、多数の土坑や環状列石を検出したにとどまっている。

茅野市教育委員会で行っている試掘調査では、これまで住居址がどこにあっていつ頃のものかを探る目的で調査を行ってきており、逆に拠点的集落と考えられる尖石遺跡にあるはずの中央広場の検出ができずにいた。今回、尖石遺跡の整備事業にあたって、集落構造を明らかにするため、この中央広場の検出を一つの目的とすることになり、宮坂氏の調査によって環状列石や土坑群の発見されているこの地点が、最も中央広場の可能性が高い箇所として調査を行うことにした。

調査では、宮坂氏の調査で検出されている21号住居址から25号住居址の位置を把握できたほか、新たに１軒の住居址を調査することができた。そして、目的であった中央広場も、列石の確認や、多数の土坑群の検出によって明らかになりつつある。特に土坑は、宮坂氏の調査した土坑群周辺にも多数存在することが明らかとなったが、その中に柱痕を有するものも多数検出され、方形柱穴列や建物址の存在も想定される。また、墓坑や貯蔵穴になると考えられる土坑も多数検出されるなかで、尖石遺跡の集落構造も次第に明らかになりつつある。柱穴や土坑の検出の多さから、方形柱穴列や建物址の配列についての検討までには至っていないが、今後さらに検討を続けていきたい。

今回の調査では、宮坂氏の調査した列石も再度全体を明らかにした。少し離れた調査区でも礫の出土はあったが、この列石との関係は明らかでない。名称も、宮坂氏は環状列石と呼称しているが、部分的なものであるので、今回は列石とした。本文でも述べたが、列石の下にある竪穴の記述など、報告書と異なっているのではないかと考えられるものもあり、古い調査資料の探索と合わせ、今後の課題となった。

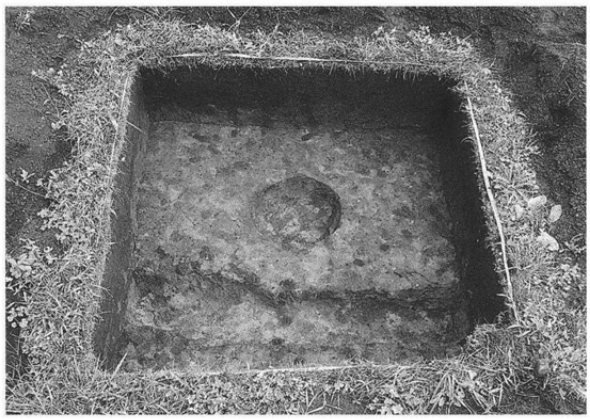
遺物は、住居址の検出が少なかったこともあって少ない。新たに発見した35号住居址からも、破片での出土は多いものの、復元できるまでに至った土器は、埋甕に使用されていたものも含め３点だけである。土坑出土の縄文土器も11号土坑出土土器（第21図５、図版15－２）が１点復元できただけで、墓坑に副葬されるような特殊な石器も出土していない。なお、時期は異なるが、旧石器時代の黒曜石製のポイントが出土している（図版15－８）。これまで、最も古い時期の出土遺物は与助尾根地区で出土している有舌尖頭器であったが、さらに古い人々の生活の痕跡が認められたこととなり、特記される。

1　作業風景（南西から）

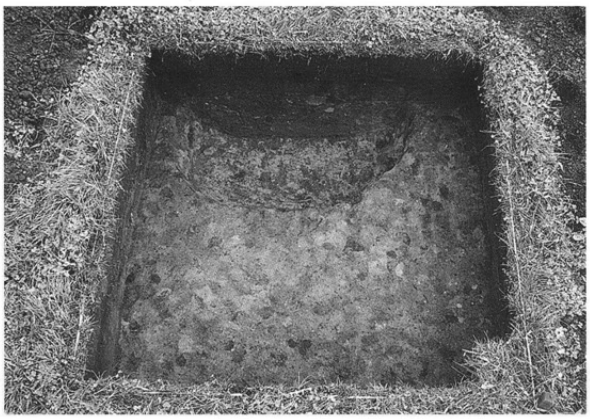
2　作業風景（南西から）

図版２

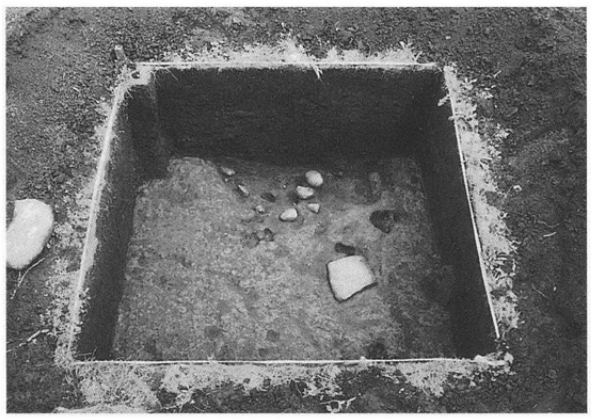
１　ⅡＪ15ｅ４　完掘（109～111号土坑）（東から）



２　ⅡＬ15ａ４　完掘（115号土坑）（北から）



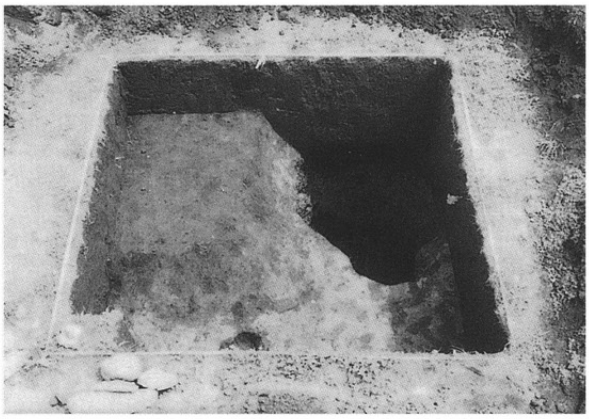
３　ⅡＬ15ｃ４　完掘（116号土坑）（北から）



４　ⅢＩ３ａ３　完掘（21号住居址）（南から）

５　ⅢＩ３ａ３　完掘（24号住居址）（北から）

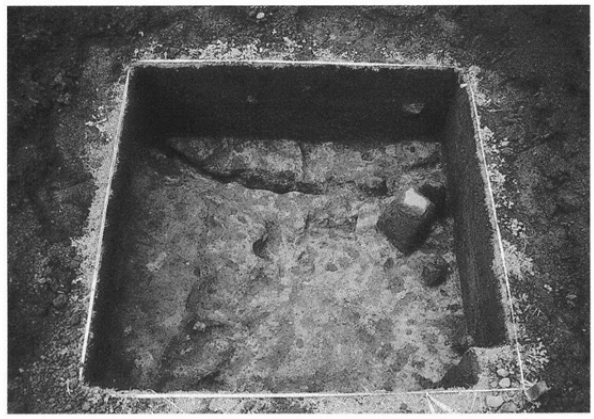
６　ⅢＩ３ｂ１　完掘（117～120号土坑）（西から）



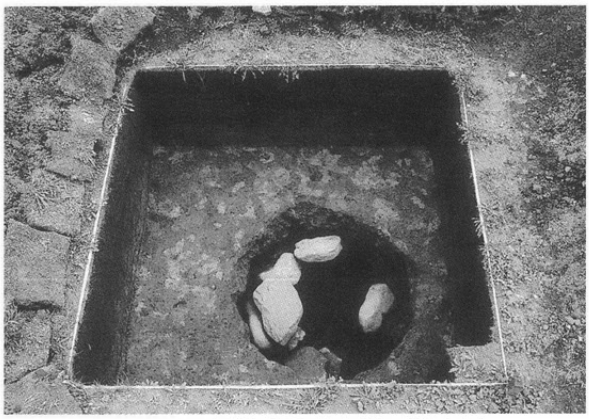
７　ⅢＩ２ｃ４　完掘（122・123号土坑）（西から）

８　ⅢＩ２ｃ４　122・123号土坑（東から）

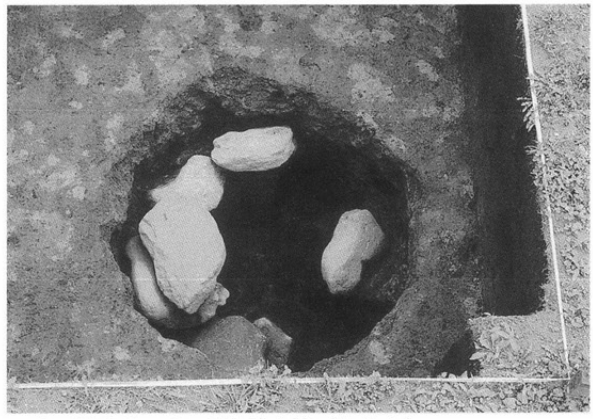
1　ⅢＩ３ｃ３　完掘（22･23号住居址､124･125号土坑）（西から）



2　ⅢＩ３ｄ１　完掘（22・25号住居址）（北から）

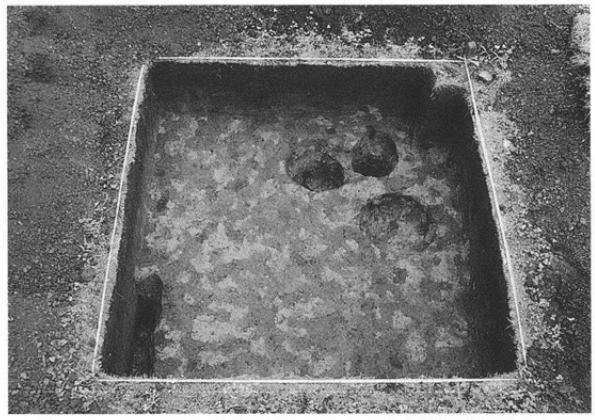


3　ⅢＩ１ｅ５　完掘（130号土坑）（北から）



4　ⅢＩ１ｅ５　130号土坑（北から）

5　ⅢＩ３ｅ３　完掘（22号住居址､132号土坑）（東から）

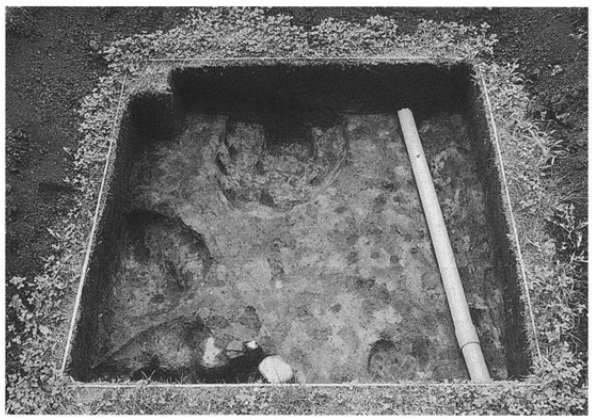


6　ⅢＪ３ａ１　完掘（138～142号土坑）（東から）

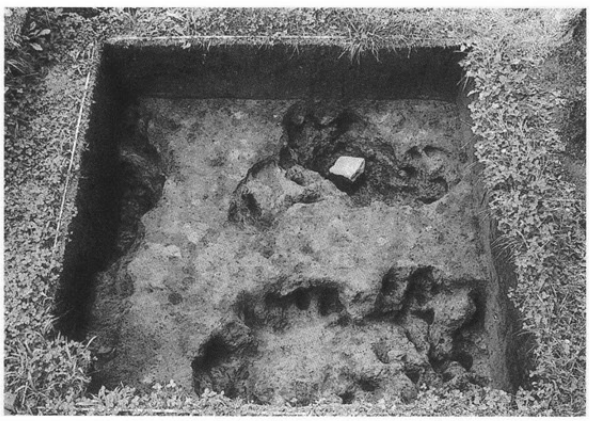
7　ⅢＪ３ｂ３　完掘（147～149号土坑）（東から）

8　ⅢＪ１ｃ３　完掘（150～154号土坑）（北から）

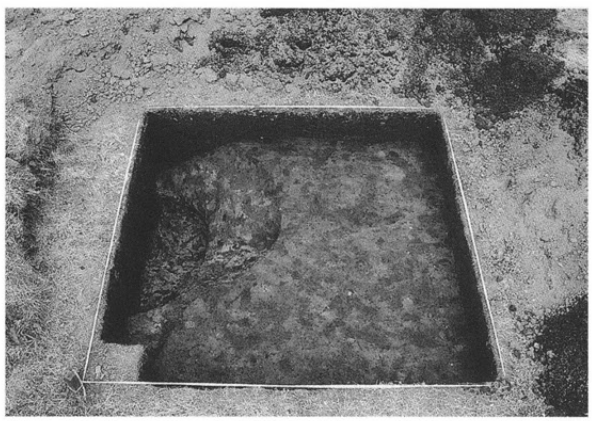
図版４



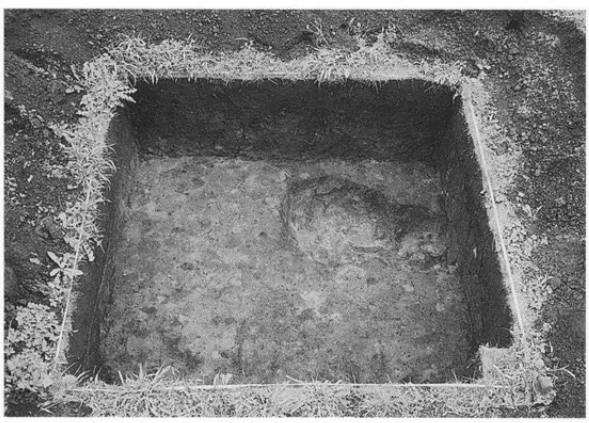
１　ⅢＪ３ｃ１　完掘（157～161号土坑）（南から）



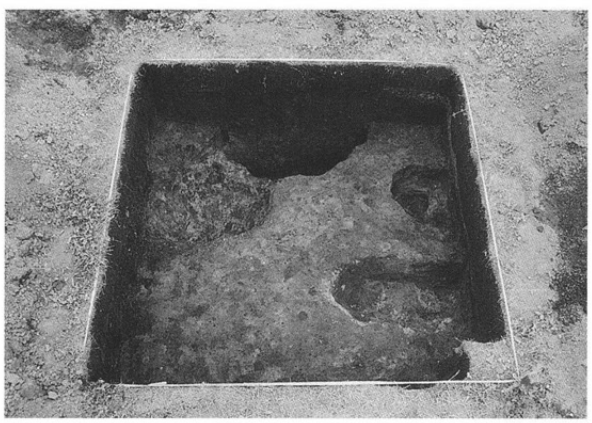
２　ⅢＫ３ａ３　完掘（170～174号土坑）（西から）



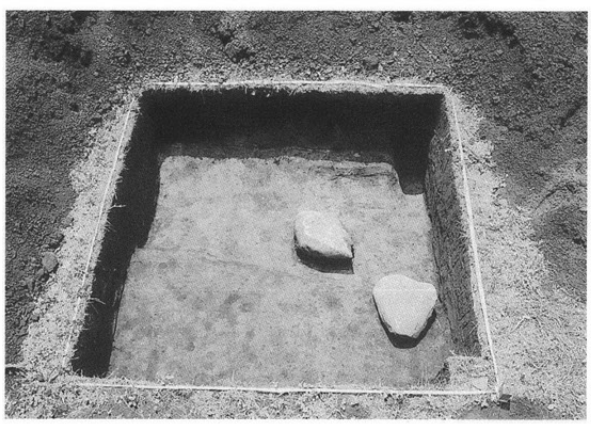
３　ⅢＫ３ｂ１　完掘（181・182号土坑）（西から）



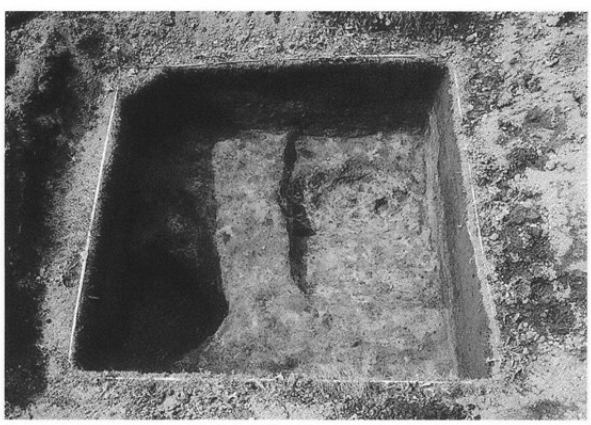
４　ⅢＫ１ｅ１　完掘（190・191号土坑）（北から）



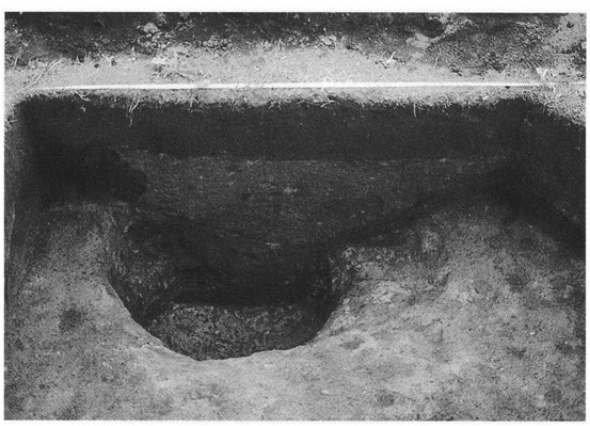
５　ⅢＬ１ｂ１　完掘（196～201号土坑）（北から）



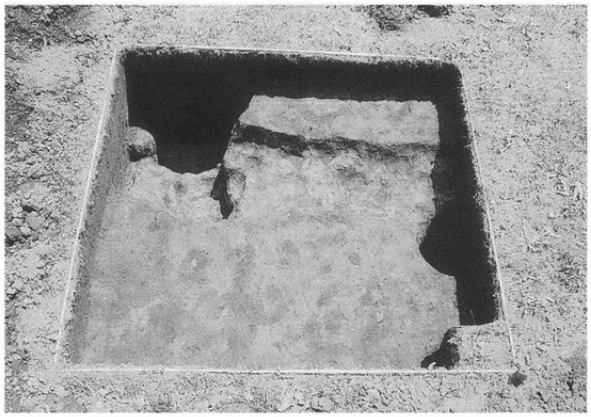
６　ⅢＬ３ｃ１　完掘（203号土坑）（北から）



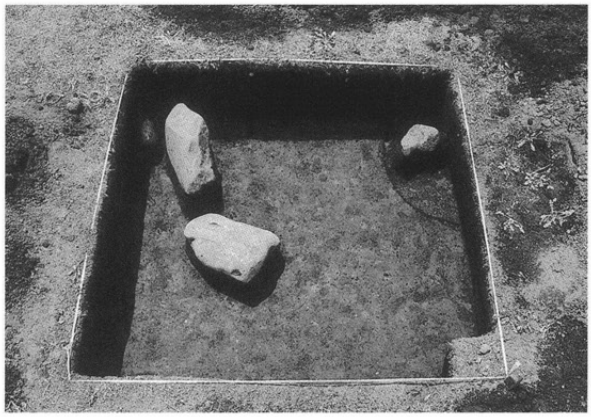
７　ⅢＬ２ｄ４　完掘（206～209号土坑）（南から）



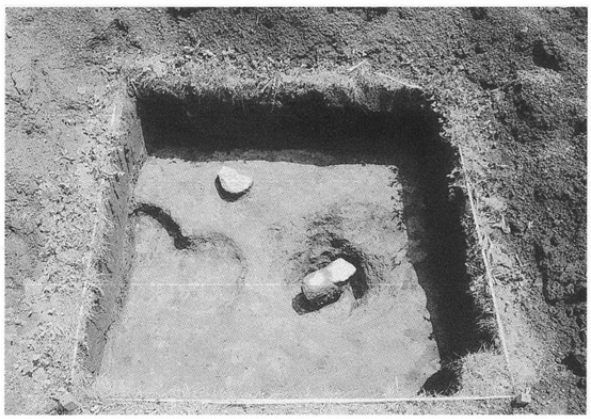
８　ⅢＬ２ｄ４　206・207号土坑（東から）



１　ⅢＬ３ｄ３　完掘（210～213号土坑）（北から）



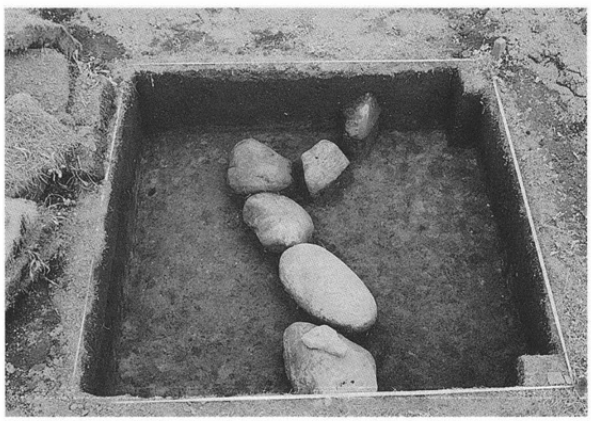
２　ⅢＬ１ｅ３　完掘（248号土坑）（北から）



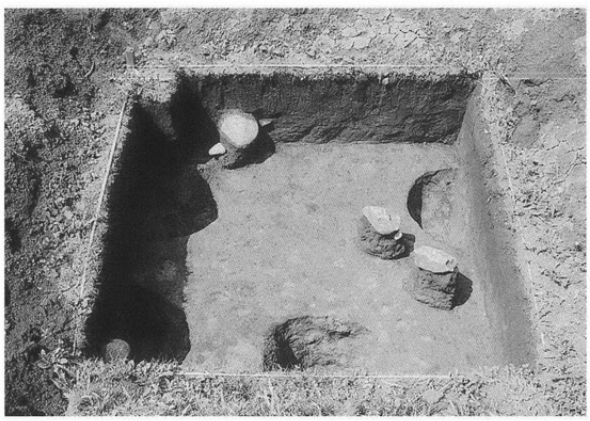
３　ⅢＬ３ｅ１　完掘（214～216号土坑）（北から）

４　ⅢＭ１ａ１　完掘（217～220号土坑）（北から）

５　ⅢＭ１ａ１　217号土坑断面（西から）



６　ⅢＭ１ａ５　完掘（北から）

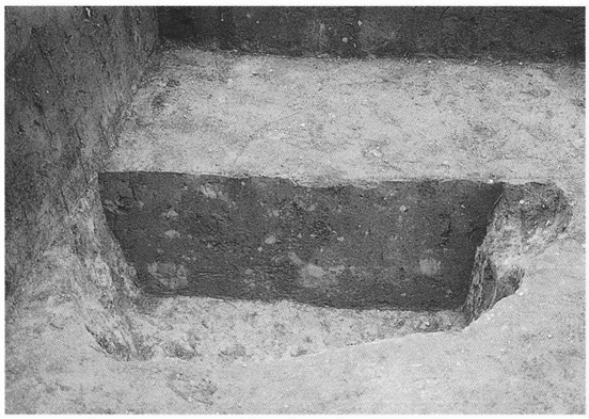


７　ⅢＭ２ａ４　完掘（221～225号土坑）（南から）

８　ⅢＭ３ａ３　完掘（226・227号土坑）（南から）

図版６

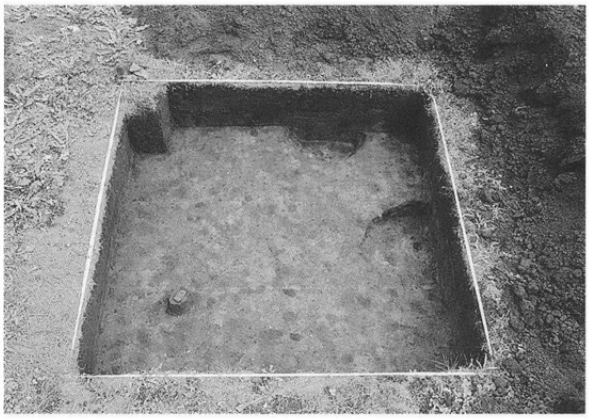
１　ⅢＭ１ｂ３　完掘（228号土坑）（東から）



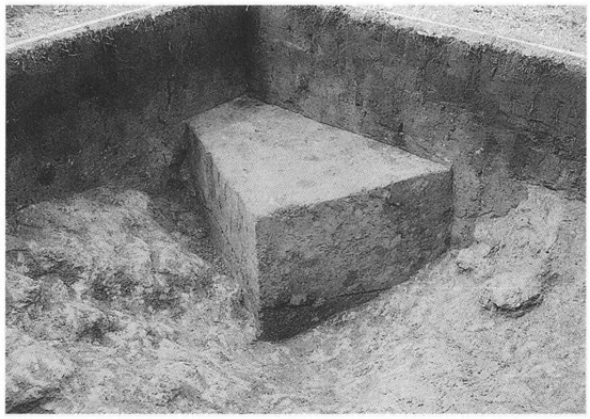
２　ⅢＭ１ｂ３　228号土坑断面（東から）

３　ⅢＭ２ｂ２　完掘（229号土坑）（北から）

４　ⅢＭ３ｂ１　完掘（230～235号土坑）（南から）

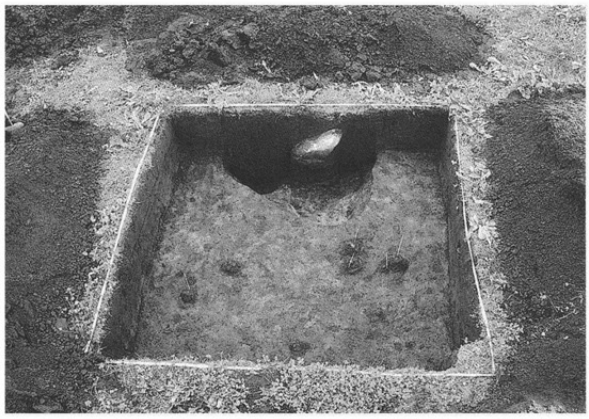


５　ⅢＭ２ｃ４　完掘（６・９号土坑）（南から）



６　ⅢＭ１ｄ３　南西隅倒木痕（237号土坑）（北東から）

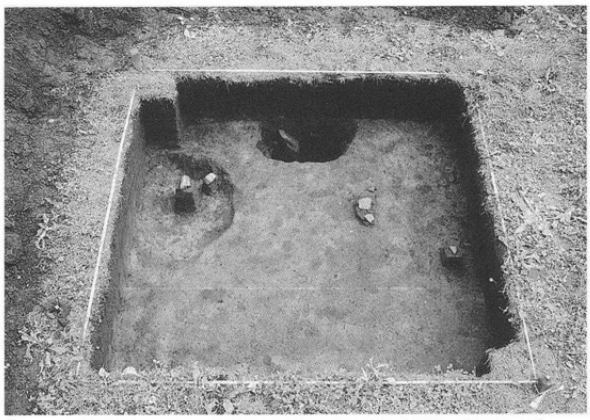
７　ⅢＭ１ｄ３　完掘（237～239号土坑）（東から）



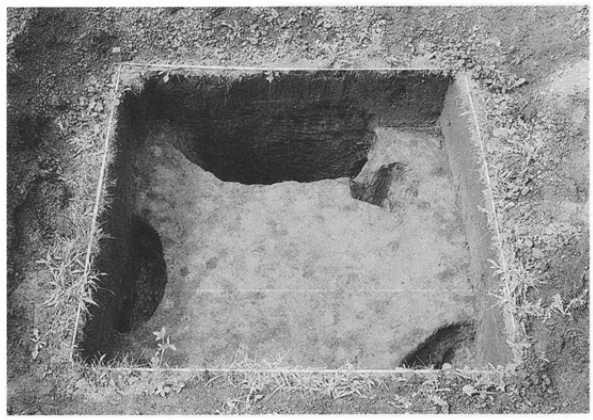
８　ⅢＭ２ｄ２　完掘（２～４号土坑）（北から）

1　ⅢＭ３ｄ１　東壁（28･29､32～34号土坑）（西から）

2　ⅢＭ３ｄ１　完掘（27～30､32･33号土坑）（南から）

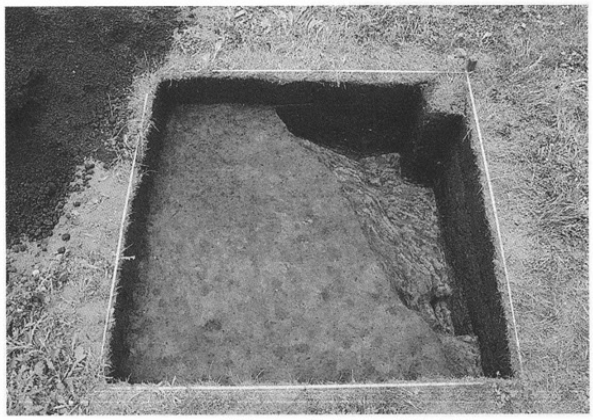


3　ⅢＭ１ｅ５　完掘（240・241号土坑）（北から）

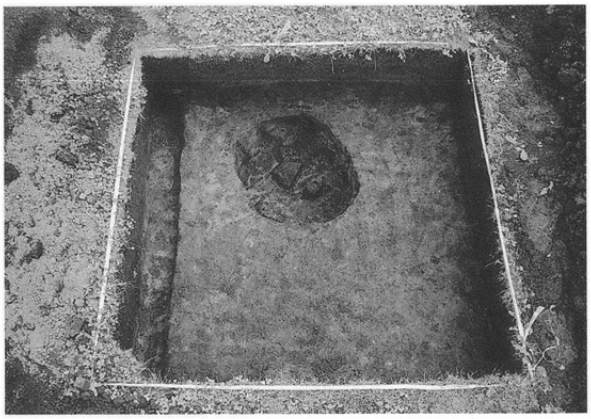


4　ⅢＭ２ｅ４　完掘（10、15～17､20号土坑）（南から）

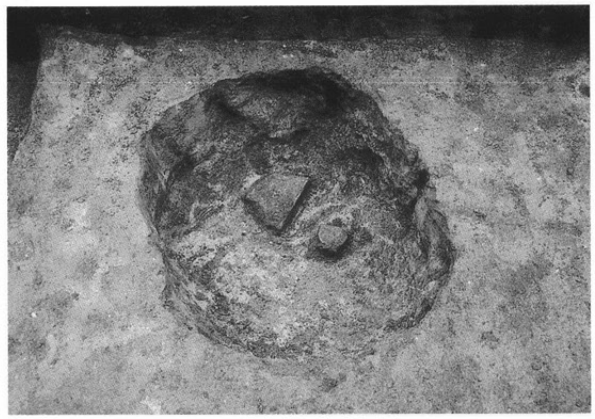
5　ⅢＭ２ｅ４　15・16号土坑（南から）



6　ⅢＭ３ｅ３　完掘（55号土坑）（東から）

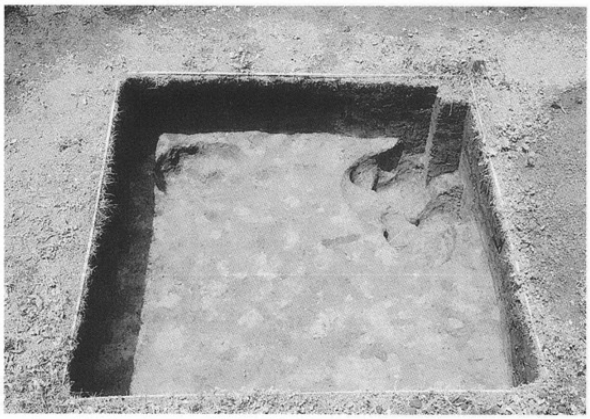


7　ⅢＮ２ａ２　完掘（22号土坑）（西から）



8　ⅢＮ２ａ２　22号土坑（西から）

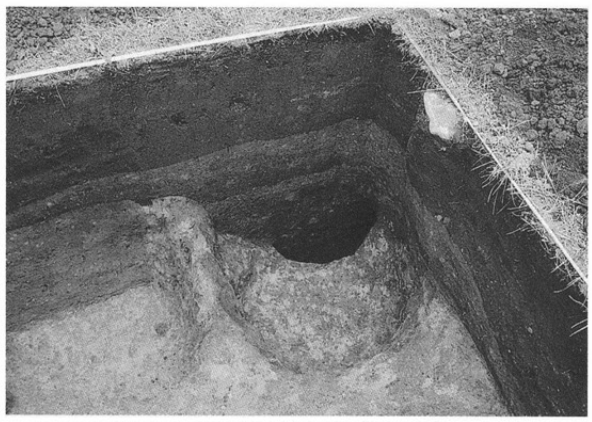
図版８



１　ⅢＮ１ｂ５　完掘（242～245号土坑）（東から）

２　ⅢＮ２ｂ４　完掘（70～72、74号土坑）（北から）

３　ⅢＮ２ｂ４　70号土坑（東から）

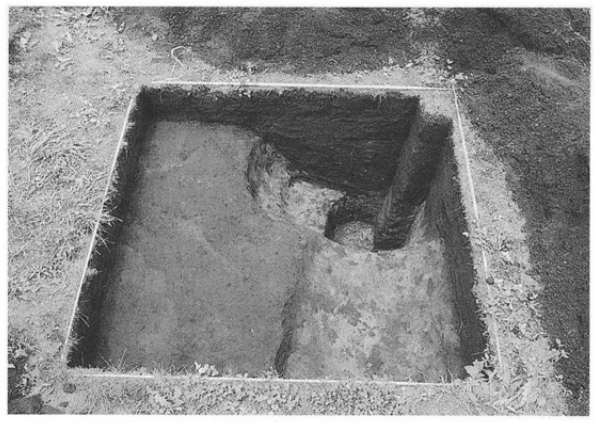


４　ⅢＮ２ｂ４　71・72号土坑（北から）

５　ⅢＮ２ｂ４　74号土坑（北から）

６　ⅢＮ３ｂ３　完掘（246号土坑）（南から）

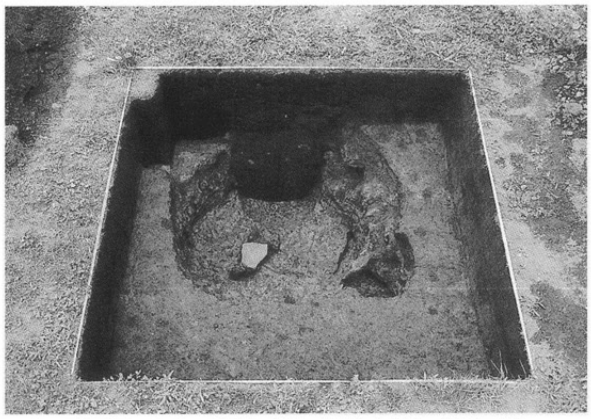
７　ⅢＮ２ｃ２　完掘（89・90号土坑）（北から）



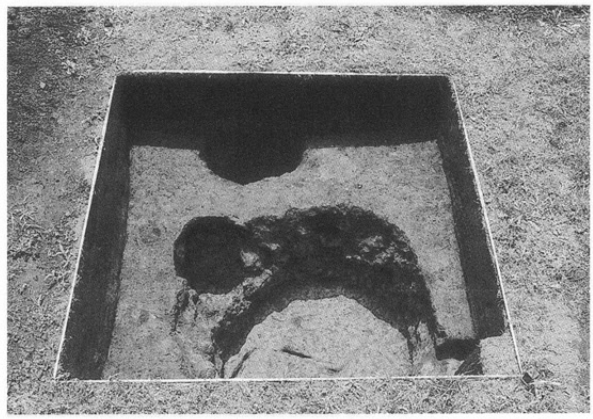
８　ⅢＮ３ｃ１　完掘（82・83号土坑）（東から）

1　ⅢＮ２ｄ４　溝掘り下げ状態（南から）

2　ⅢＮ２ｄ４　96・95号土坑半裁（東から）



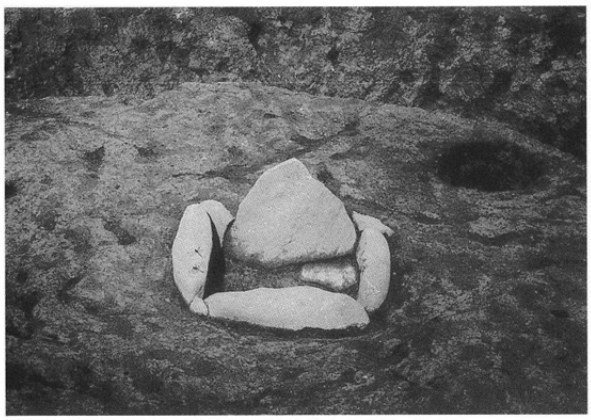
3　ⅢＮ２ｄ４　完掘（95～97号土坑）（南から）



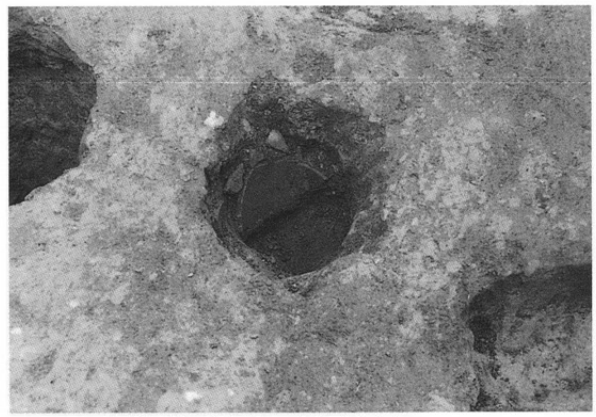
4　ⅢＮ２ｄ４　完掘（96・97、100号土坑）（北から）

5　35号住居址　完掘（南西から）

6　35号住居址　完掘（北西から）



7　35号住居址　石囲炉（南西から）

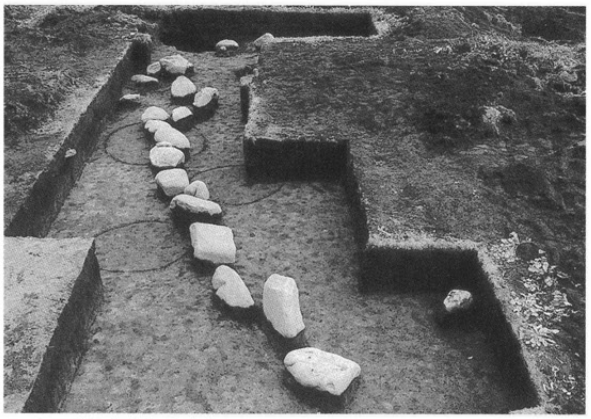


8　35号住居址　埋甕１（南西から）

図版10

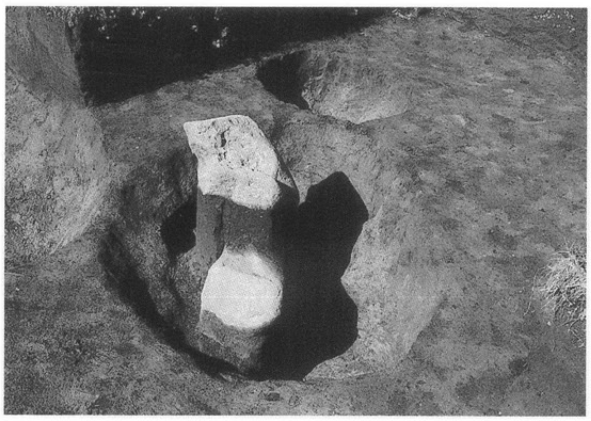
1　35号住居址　埋甕２（南西から）

2　列石（南から）

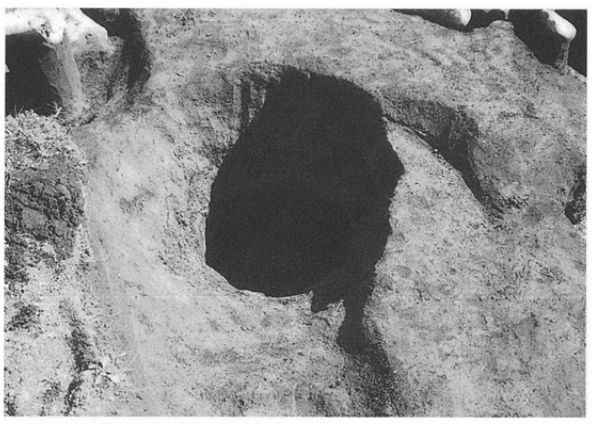


3　列石（北から）

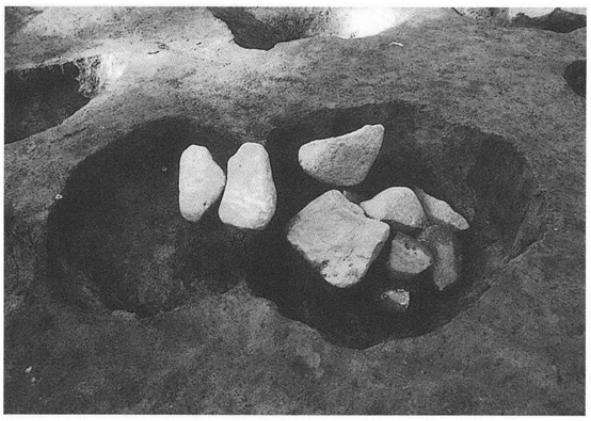
4　土坑群（東から）



5　１～４号土坑（南東から）



6　５号土坑（北西から）



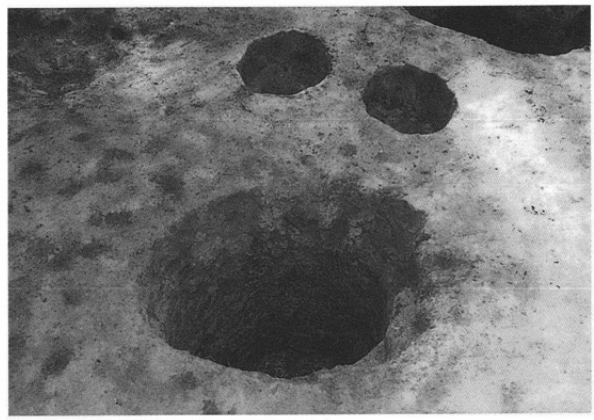
7　７・８号土坑（南東から）

8　10号土坑（東から）

1　11・12号土坑（南東から）

2　13・14号土坑（南東から）

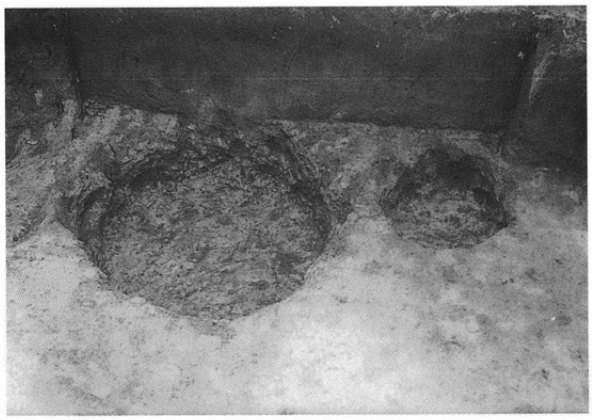
3　15～17号土坑（東から）



4　20～21号土坑（北東から）

5　26号土坑（東から）

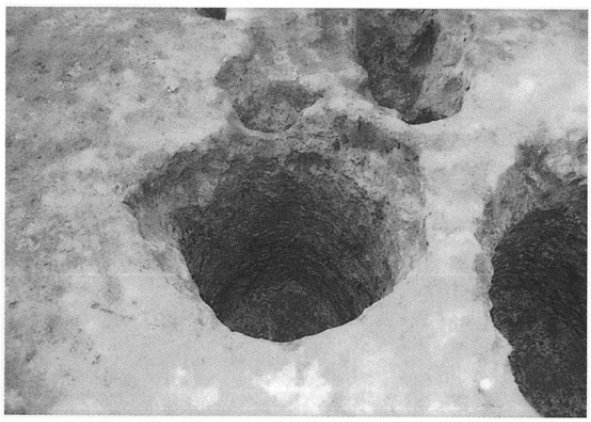
6　28・29号土坑（北東から）



7　27・30号土坑（東から）

8　35・36号土坑（東から）

図版12

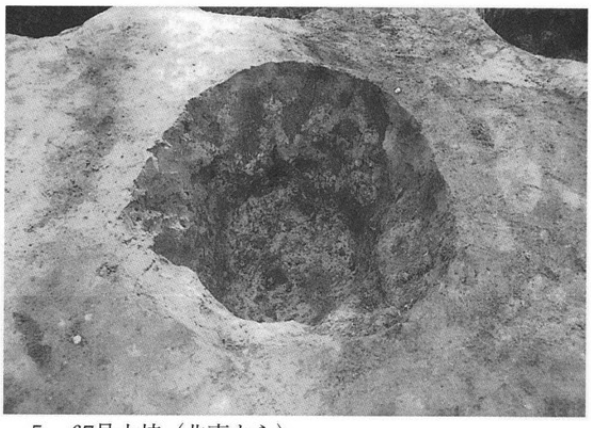


1　42号土坑（南東から）

2　43～47号土坑（東から）

3　48号土坑半裁（西から）

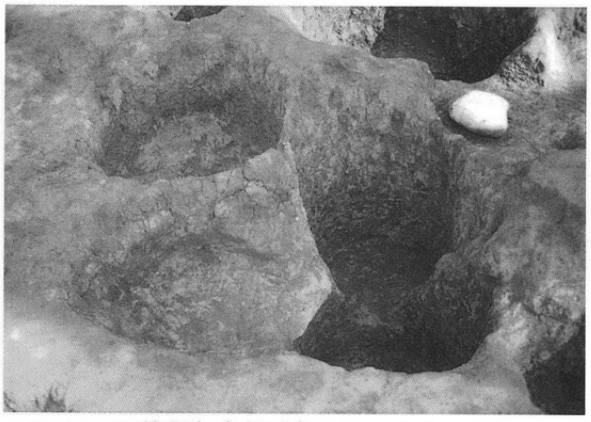
4　64～66号土坑（北東から）



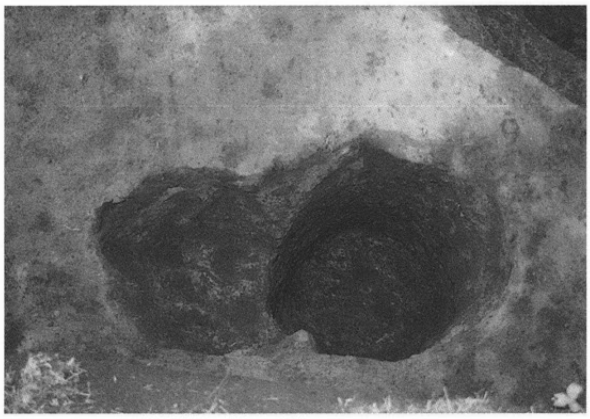
5　67号土坑（北東から）

6　68～70号土坑（北東から）

7　74号土坑（北から）



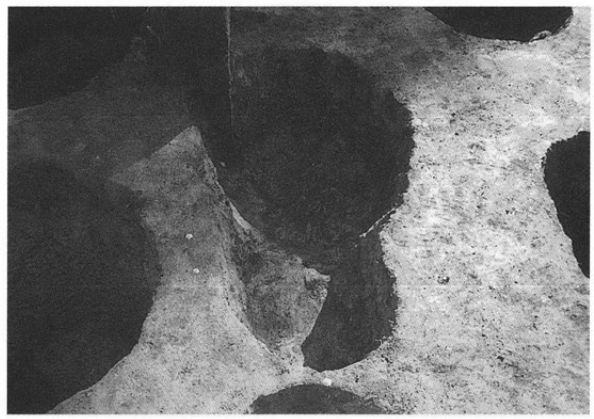
8　71～74号土坑（西から）



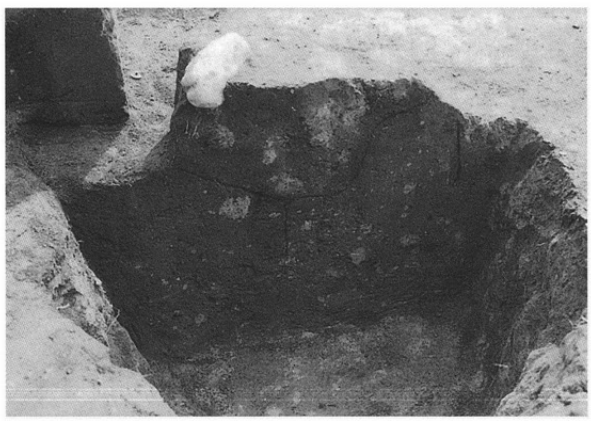
1　85・86号土坑（南から）

2　82・83号土坑（南から）

3　90号土坑（西から）



4　91・92号土坑（北から）



5　92号土坑半裁（北から）

6　93・94号土坑（北から）

7　95～97号土坑（南東から）

8　98号土坑（北から）

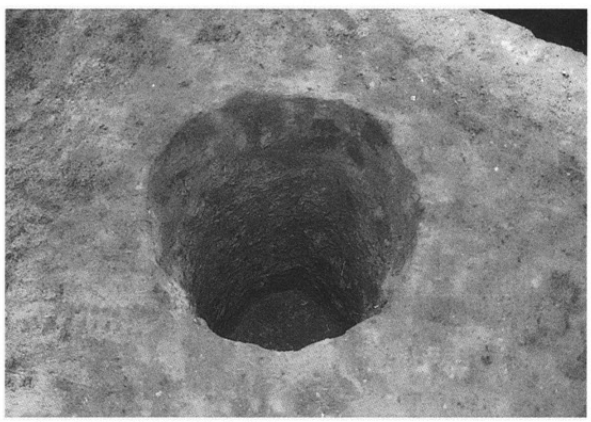
図版14

1　99号土坑（北から）

2　100号土坑（東から）

3　100・102～104号土坑（東から）

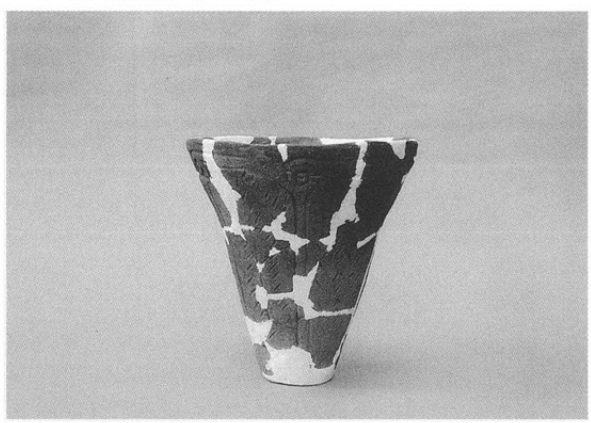
4　105・106号土坑（南東から）



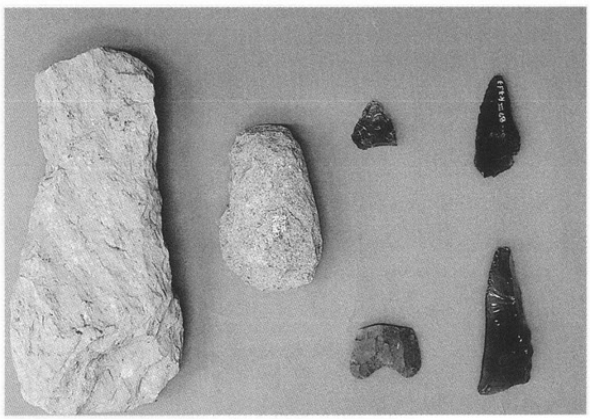
5　107号土坑（東から）

6　108号土坑（北から）

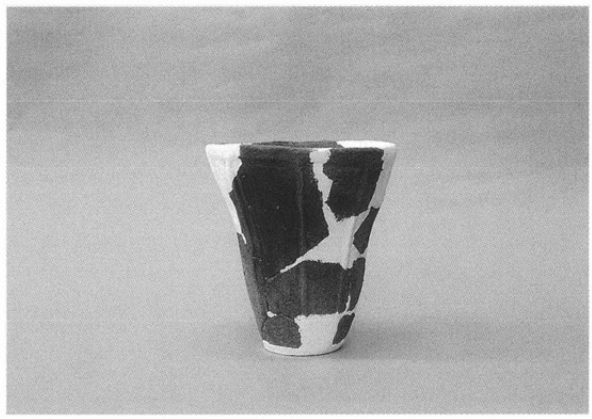
7　35号住居址出土埋甕



8　35号住居址出土土器

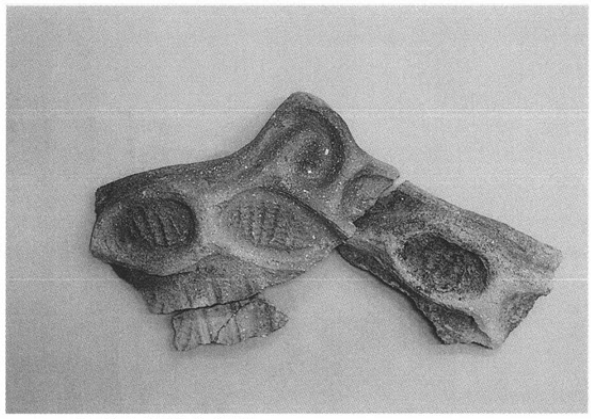


1　35号土坑出土石器

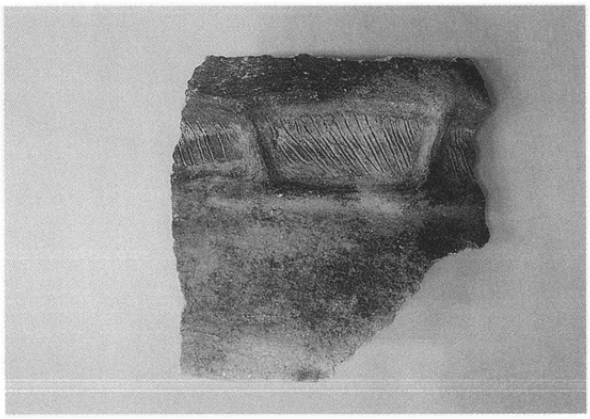


2　11号土坑出土土器

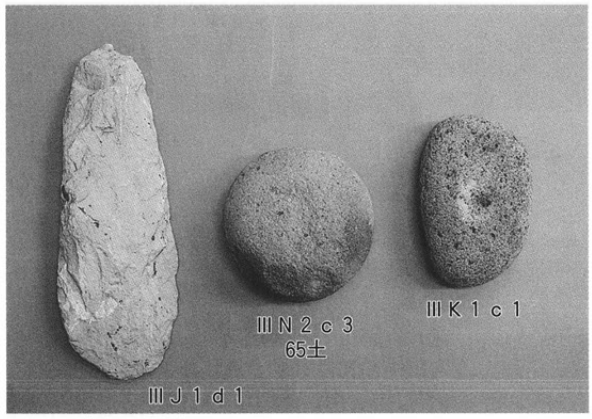
3　210～213号土坑出土土器



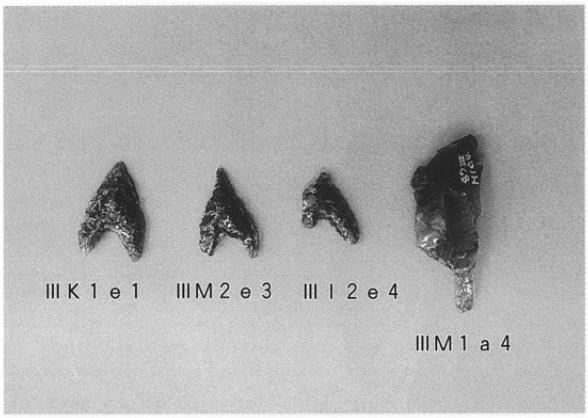
4　90号土坑出土土器



5　96号土坑出土土器



6　出土石器(1)



7　出土石器(2)

8　出土石器(3)

報告書抄録

ふ り が な	とくべつしせきとがりいしいせき
書　　名	特別史跡尖石遺跡
副 書 名	平成15年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	小林　深志
編 集 機 関	茅野市教育委員会　尖石縄文考古館
所　在　地	〒391－0213　長野県茅野豊平4734－132　　TEL0266－76－2270
発行年月日	西暦2004年３月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
尖石遺跡（とがりいしいせき）	茅野市豊平（ちのしとよひら）東嶽（ひがしだけ）4,734－2963 2964他	20214	87	36°0′36″	138°6′40″	平成15年6月18日～10月31日	474m^2	記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尖石遺跡（とがりいしいせき）	集落跡	縄文時代 中期	住居址　6基 土坑・柱穴　256基 列石	縄文土器　4点 石器　多数	

尖　石　遺　跡

――平成15年度記念物保存修理事業
（環境整備）に係る試掘調査報告書――

平成16年３月27日　印 刷
平成16年３月27日　発 行

編　集
発　行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原二丁目６番地１号
（0266）72－2101

印　刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133－５